
アルカディア

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカディア

【Nコード】

N9297W

【作者名】

灯里

【あらすじ】

まだ見ぬ世界、そこで待つ様々な出会いを通して少年は成長していく。

理想郷の名で呼ばれし世界、アルカディアで紡がれる人と竜の物語。

貴方にとって世界は美しいですか？

著者HPより加筆、修正したものを掲載しています。

登場人物紹介

『アルはさ、ずっと俺の傍に居てくれる？』

ルカ・エアハート

主人公。竜と心を通わせる、ドラクナー声を聞く者の少年。

海上都市エランディアの出身のため、成人の儀を終えるまで一度も街から出たことがなかった。好奇心旺盛で笑顔を絶やさぬ彼だが、考えなしというわけではない。感情表現豊かで、同年代と比べて少々子供っぽい。

素早さを生かした剣術は父仕込みで短剣使い。スベルアリア魔歌はアルトウールに教えられた。

生来の才能も相俟って、本人は気付いていないが、普通の魔奏士シンガーとは比べものにならない威力を発揮する。

ルカが持つ魔剣ジークルーネは、アルの牙より作られた強力な魔剣で竜笛の代わりでもある。

『忘れるな……此の命有る限り、私はお前と共に在る』

アル

珍しい銀色の竜。瞳は金色。いつもルカの肩に乗っている彼の相棒。ルカが三歳の時に彼と出会い、それ以来ずっと側にいる。

サイズは肩に乗るくらいなのだが、本当の姿では無い。ロストアリアルカの魔歌の師匠で、彼もまた強大な魔力を持つ。喪歌の使い手。

博識で世界情勢から一般常識まで様々な知識に通じており、少々

世間知らずなルカに取って頼れる存在。

決して自らの名を名乗ろうとはせず、ルカにもアルと呼ばせている。真名はアルトウル・レインセル・シルバーレイ。

ルカに出会う以前は人間を嫌い、世界に害をなす存在だと考えていた。

しかしルカと共にいることで人と関わるようになり、現在は人間もこの世界に生きる一つの命だと思っている。

『別に良いだろう。俺の気まぐれだと思っていればいい』

イクセル・クライン

愛称はイクセ。《黒呀》の二つ名で呼ばれる凄腕の冒険者^{ハンター}。

刀と呼ばれる特殊な片刃の剣を扱うが、普段は刀を抜かずに無銘の長剣を使う。

歌は意外に上手く魔歌も一応歌えるが、嗜み程度。同業者には積極的に係わりとうとしないが、基本は世話やきである。

しかし自らに関することは黙して語ろうとはしない。

若いながら冒険者としては最高位に位置し、他の冒険者からも一目置かれている。

両親は既に死去しており、どうやら大陸出身者ではないようだが……。

ある麗らかな日

誰かが歌を歌っていた。優しく温かさに満ちた子守歌を。静かに奏でられる穏やかな旋律はどこか懐かしく、忘れていた何かを思い出させてくれる。

緩やかに波打つ青い髪をかき上げながら女性が笑っていた。慈しむように、愛おしむように。だが彼女の顔は霞掛かったようにはつきりしない。

『大丈夫よ。眠るまで側に居るわ』

もはや顔すら思い出せぬとしたら母は怒るだろうか。

燦然と輝く太陽に見渡す限りの青い海。海から吹き付ける風は、潮を孕んで独特な香りを運んで来る。

天気は雲一つない快晴。夜が明ける前の深い青のような髪を持つ少

年は黒く艶掛かった深紅の瞳を、自分の肩の上で寛ぐ存在に向けた。

「アル、もしかして寝てない？」

少年の肩に乗るのは皮膜の翼に煌めく白銀の鱗を持つ——竜。

彼は猫のような縦長の瞳孔、黄金色の瞳を細める。

『私は寝てない。あまりに退屈だったただけだ』

「それ寝てたでしょうが。いくら俺の肩の上が楽だからって寝ないで欲しいんだけど」

中性的な顔立ちの少年——ルカ・エアハートは半眼で睨んだ後、呆れるように肩を竦めて見せた。今彼等が居る場所は海上都市と呼ばれるエランディアの一角、薄紫の花が咲き乱れるあまり地元の者も近寄らない場所である。

遠目にはエランディアの本島が見え、ルカの頭上をカモメの親子が優雅に通り過ぎた。今日も平和である。

『仕方ない。それが自然の摂理だ』

銀色の竜——アルトウールは片目を瞑ると翼を閉じ、くるりと体を丸めた。確かにこの気候では眠たくはなるかもしれない。

何故、二人？ がこんな場所に居るのかと言うとこの薄紫色の花、ラベンダーである。防虫や精神安定、はたまた食用まで様々な用途があり、需要は高い。

ルカは香りを楽しみながらラベンダーを摘み、持ってきた籠に入れた。その間に転寝をしていたアルトウールを突いてみる。

『む、終わったのか？』

彼が目を開けると同時に、本島の一番高い所に築かれた時計塔から正午を告げる鐘の音が響いて来る。

すっかり時間の感覚を失っていたルカは、今更ながら自分が空腹であることに気付いた。

「うん。ラベンダーもこれくらいあれば十分だし、帰ろうか」

『承知した』

ルカの肩から下りたアルトゥールは天に向かって短く吠える。

次の瞬間、彼の眼前に見上げる程の高さの竜が居た。太陽の光に煌めき、不思議な光沢を放つ銀色の竜、これがアルトゥールの本来の姿。

ルカも何故彼が普段、小さな姿で居るのか知らない。理由は一重にアルトゥールが彼の側に居たいだけなのだが、ルカがそれを知る筈もなく。アルトゥールは背にルカを乗せると翼を羽ばたかせ、悠然と蒼穹に舞い上がった。

眼下に広がるのは青く美しい色を湛えた母なる海と大小様々な島である。ルカが住む街、海上都市の名で呼ばれるエランディアには多くの島々が点在しており、大きさだけで言えば群を抜いている。もっとも、全てに人が住んでいる訳では無いから、人口だけを比べれば普通の街より少ないくらいだ。

実際飛んでいるのはアルだが、風を切って飛ぶのはやはり気持ちいい。

相棒もルカ的心情を分かっているようでわざわざゆっくりと飛んでくれているのだろう。

本島が徐々に近付いて来る。エランディアは一つの島に建物が密集していることでも有名であり、当然アルが降りれるような場所は少ない。

家から近い広場なら或は可能だろうが、そんな場所に着陸する程ルカも馬鹿ではない。

時計塔の近くは比較的広く、普通の竜なら降りる事が可能だ。ただし、誰か先客が居る場合を除いて。

アルは緩やかに減速すると音を起てることなく、軽やかに降り立つ。ルカを地面に降ろすと銀色の翼を閉じ、再び小さな姿に戻る。そして彼お気に入り場所であるルカの肩に飛び乗った。

「ありがとう」

『礼など必要ないと常々言っているだろう』

礼の言葉は何度聞いても慣れることはなくて、思わず顔を逸らしてしまう。アルの様子が面白くて彼に気付かれないよう小さく笑った。

「うん、でも大切なことだから。 “ありがとう” って言うのは当たり前だよ」

そう言って微笑するルカは、思わず笑い返してしまうような太陽に似た暖かい笑みだ。

エランディアから一度も出たことがない彼は、街の人々を見て育つて来たこともあり、人と人の繋がりを大事にする心優しい少年だった。

ルカの優しさには人も竜もない。彼にとって竜とは友人であり、家族なのだから。

『分かつている。ほら、ゆくぞ』

ぺしりと軽く尾で叩かれた。余程恥ずかしかったのか、目も合わせしてくれない。

ルカは油断すれば零れそうになる笑いを堪えながら、石畳みを踏み締めるように歩いた。

ドラグナー

街中に行くルカに露店の主人や子供たちから声が掛けられる。
まだ成人を迎えてはいないものの、所謂何でも屋のような事をしているためだ。ルカにとつて趣味の一貫のようで、滅多に家にいない父親に叩き込まれて育ったからと言うのもある。

エランディア独特の石造りの街並は訪れる者に堅さよりも人の温もりを伝えてくれる。それはここに住む人々の明るさに寄るものだが、辺境とも言える都市では珍しい。

「ルカ兄ちゃん、僕も今度アルに乗せてね！」

「アルが良いなら俺は大歓迎だよ」

一人の少年がお願いすると一緒に遊んでいた子らも僕も、私もと声を上げる始末。その辺りは流石は子供である。

自分たちの預かり知らぬ未知のものにも瞳を輝かせる彼等は正に好奇心の塊だ。

「私は子供は苦手なんだが……」

ぼつりと呟いた一言が子供たちに聞こえる訳もなく。例えばアルが大声で叫んだとしても聞こえまい。普通の人間には彼の、というか竜の言葉を理解出来ないからだ。

だが稀に人の中にも竜の言葉を理解し、心通わせる者が居る。ルカもまたそんな人間の一人であり、彼のような者を声を聞く者と呼ぶ。
ドラグナー

しかし何故彼等が竜の言語を理解出来るのかは分かっていない。

一種の精神感応では無いかと言われているが、真実に辿り着いた人間は一人としていなかった。

狭々とした街ではあるが、ルカは生まれ育ったこの街が大好きだった。

しかし一度としてエランディアを出た事がない彼は、外の世界に憧れてもいた。ルカは声を掛けて来る人々に挨拶しながら、ある家の前で止まった。

「ヘンリエッタさん、居る？」

「はいはいー、少し待ってね」

呼び掛けてノックしてみると直ぐに応えが返って来る。開けられた扉の先、声の主はエプロンを付けた若い女性だった。

アーモンド型をした灰色の瞳に、明るい茶の髪を緩く巻いて肩に流している。二十代半ばほどにしか見えないのだが、実年齢は三十歳を超えているらしい。

「ルカ君、いつもありがとう。お昼まだでしょう？ 良かったら食べに行つて。勿論アル君もね」

ヘンリエッタの申し出は非常にありがたかった。

ルカは滅多に家に寄り付かない父親の影響もあり、家事全般をこなすことは出来る。

しかしヘンリエッタの料理は温かくて、好きだった。彼女が作る料理は覚えていない母の味だから。

『お言葉に甘えさせて貰ったらどうだ？』

「そうだね。それじゃあお邪魔します」

ルカは軽くお辞儀をすると、アルを乗せたままお邪魔する。

昼食は海老やイカがふんだんに使われたシーフードパエリアだった。ほんのりと色付いた海老やサフランの香りが何とも食欲を刺激する。ヘンリエッタが作るパエリアは絶品だ。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

美味しそうにパエリアを頬張るルカをヘンリエッタは優しい瞳で見つめていた。

彼女は数年前に水難事故により、夫と小さな息子を亡くしていた。子供が生きていたらルカと同じような年頃だろう。

「ヘンリエッタさん？ どうしたの？」

「何でもないわ。ルカ君が美味しそうに食べてくれるから作り甲斐があるわね」

ルカはヘンリエッタの思いを知るよしもない。ただテーブルに座るアルだけが彼女の思いを知っているかのように目を伏せた。

パエリアを美味しく頂いた後、ルカはヘンリエッタが淹れてくれたハーブティーとラベンダーを練り込んだ砂糖菓子を頂いていた。気が利く彼女はわざわざアルの分まで用意してくれている。

竜は大気中のマナを取り込むことで生きている。つまりは食事は必要ないのだが、アルは甘い物が好みなのか菓子類を食べることが多い。

現に今も砂糖菓子を美味しそうに（ルカ以外の人間が見れば分らないが）食べていた。

『ヘンリエッタが作る菓子は美味いな』

「ヘンリエッタさん、アルも美味しいって言ってます」

ルカが通訳しないと竜の声は、普通の人間には単なる鳴き声にか聞こえない。

彼のような声を聞く者は少なく、例え声を聞く者であつても竜と心を通じ合わせることは難しいと言われている。

「あら、嬉しいわ」

本当に嬉しいそうに食べる二人を見てみると、ヘンリエッタの顔も自然と綻ぶ。

ルカが小さな頃から共に暮らしてきたアルは、家を空けることの多い父——ゲイルよりも彼に取つての親なのかもしれない。

事実、ルカに多くの知識や魔歌を教えたのも彼だ。この世界、アルカディアに存在する魔法体系は竜たちが使う喪歌であり、人が扱えるようにしたのが魔歌である。

魔歌、喪歌とは歌うことにより、世界に漂う不可視のエネルギー、マナと自らの魔力を媒介にし、様々な現象を引き起こす術だ。

父と息子、微妙な距離

話しに花を咲かせていたルカの耳に、何かが潰れたような嫌な音が届いた。

かなり近い。考えなくても分かる。音がしたのは自分の家の方で、音の原因は勿論、あの父親だろう。

『……ゲイルが帰って来たようだな』

アルは非常に嫌そうな顔をして、尻尾をテーブルに叩きつける。決定的な親友の一言に、ルカは小さく溜息を付き、静かにティーカープを置いた。

まさか息子の誕生日に帰ってくるとも思っていなかったが、一体どんな風の吹きまわしか。

「ヘンリエッタさん、父が帰って来たみたいなので失礼します。ごちそうさまでした。美味しかったです」

「あら、そうなの？ いいのよ、気にしないでいつでも来てね」

はい、と頷くとアルを肩に乗せヘンリエッタの家を出る。

次にルカの目に入ったのは見るも無残に屋根が潰れた我が家。隕石でも落ちてきたのか、大きな穴を見るだけで悲しくなってきた。我が父のことながら思わず頭を抱えなくなる。

居間に続く扉を蹴破る勢いで開ける。すると、穴の空いた天井を気にする風もなく、椅子にもたれ掛かるように座る一人の男があった。

年の頃は三十代をいくら過ぎたところ。みずみずしい若葉を思わ

せる緑の髪と同色の切れ長の双眸が印象的な美丈夫。今正に旅から帰って来たような服装で、唯一の武器らしき物は腰に下げた長剣だけ。

「……父さん、帰ってくる時は普通に来てくれない？　いつも屋根修理するの俺なんだから」

男——ゲイル・エアハート、正真正銘ルカの父親は、ルカが帰って来たことに気付き、笑みを浮かべた。ひらひらと手を振り、ルカと彼の肩に乗った存在に声を掛ける。

「エランディアは竜が降りる所が少ないから仕方ないだろ。それより元気にしてたか？」

ゲイルは立ち上がるとわしゃわしゃとルカの頭を撫でる。

彼は相棒の竜——ゼフィロスと運び屋の仕事をしているため殆ど家に寄り付かない。ルカの記憶によると最後に帰って来たのはもう一年近く前か。

家々が密集しているエランディアは確かに竜が降りられる場所は少ない。

だが無いわけではないのだ。流石に屋根を破つての登場はないだろう。

「一応は元気だけど……」

『ゲイルよ、こうも家に寄り付かないのでは息子に嫌われても文句は言えんぞ』

ルカの肩に乗るアルもやや呆れたような口調で嗜める。家に居ないゲイルを遠回しに責めているのだが、果たしてそれに気付くかど

うか。

今日だってルカの一五歳の誕生日を分かって帰ってきたのか、それとも偶然なのか分かったものではない。

だがそんな父親でも、息子を思う気持ちは本物だ。ただ、愛情表現が分かりにくいというか、不器用というかよくも悪くもそんな人間なのである。

「あのなあ、俺だって好きで寄り付かない訳じゃねえよ。じゃなきゃわざわざたまにでも帰る理由なんてないだろ」

アルが言いたいことは分かる。ゲイルが父親としてルカにしてやれたことなど数える程しかない。

ゲイルが家を空けるようになったのは妻であるシルフィアを失ってからだ。何もかもが虚しくなった。生きる意味を見失った。

しかし悲しいのはルカも同じ。

だが一番辛い時に自分は、ルカの傍に居てやれなかった。理由を付けて全てから逃げ出した臆病者でしかない。

そんな負い目もあり、ルカにどう接していいのかすら分からない。情けなくてゲイルは気付かれぬよう自嘲気味に笑う。

「それよりルカ、今日は誕生日だろ？ ほら、やるよ」

ゲイルが投げて寄越したのは、鎖の付いた銀のロケット。精緻な細工は素晴らしく、思わず見入ってしまいそうだ。中央にはルカの髪と同じ、小粒な青い石が象眼されている。

おもむろにロケットを開けば、一枚の絵が飾られていた。若き日の父に幼い自分。そして柔和な笑みを浮かべた青い髪の女性——シルフィア・エアハート。ゲイルの妻であり、ルカの母に当たる人。

「かあ……さん？」

「そうだ。いつでもお前が思い出せるように」

震える声で呟けば、ゲイルが破顔する。

優しくかった母の思い出は記憶の中に埋没して行く。ルカはいつしかシルフィアの顔さえ思い出せないようになっていた。

そして今日成人の儀を終えればルカはこの街を出て、世界を回ろうと思っている。

ずっと前から憧れた外の世界。例え新しい記憶が増えようと母の顔を忘れぬように。ゲイルなりのプレゼントなのだろう。

「……ありがとう。嬉しい」

ルカはロケットを閉じ、そつと両手で包むように握り締める。

怖かった。日々思い出せなくなる母の顔。いつか何もかも忘れてしまふのではないかと。

深い赤の瞳から涙が滲む。アルは心配そうに彼に身を寄せ、何も言わずにルカを見つめている。

ゲイルはばつの悪そうな顔をしながらも安心させるようにぼんぼんと頭を撫でた。子供でいられる最後の時間。声押し殺してルカは泣いた。

海神の抱擁

ゲイルはルカにロケットを渡すと休む暇もなくさっさと旅立った。何でも重要な依頼があるらしい。

本人は認めないだろうが、どうやら本当にルカの誕生日だから戻って来たようである。時計塔まで見送りに来たルカに、ゼフィロス——父の相棒の竜がこっそり教えてくれた。

その足でエランディア唯一の教会に向かう。成人の儀はそこで行われるからだ。

アルカディアに特定の宗教は存在しない。自然に宿るとされる神々を信仰するのが一般的で、エランディアは海の神、ネレウスを奉っている。

時計塔近くにある教会は海の神を奉るだけあり、白く塗られた壁と装飾に使われた青が印象的だ。白亜の教会は陽光を弾いて白く輝いている。

今日成人の儀を行うのはルカだけ。ルカが教会に足を踏み入れた時、既に神官二人が彼を待っていた。

「ルカ、よく来ましたね。お待ちしていましたよ」

柔和な笑みを浮かべるのは三十代半ばの男。純白の聖服を纏い、長い白髪を後ろで結んでいる。真っ直ぐに見据えられたエメラルド色の瞳は、まるで全てを見通すように澄み切っていた。

彼——ティアは代々ネレウスに仕える神官の家系で、後ろに控える少年は彼の弟である。

「こんにちは。ティアさん、ジェイド」

ジェイドとルカは同じ年で彼は既に成人の儀を終え、神官の道を歩んでいる。

そつと目配せをすればジェイドは小さく笑う。親友と言っても過言ではない彼は、ルカともう一人の親友とは性格が全く違うとは言え、大事な友人だった。

「こんにちは。早速ですが初めましょうか」

「はい」

成人の儀と言っても複雑なことは一切ない。ただ祝福を受けるだけ。ルカはティアの前まで歩み出ると絨毯の上に跪いた。

アルは儀式の邪魔をしないように椅子の上で行儀良く座っている。本来なら一時間ほど掛かる儀式だが、今回はルカ一人であるため、略式である。

「……汝に海神わたつみの祝福を与えん」

ルカに授けられた言葉は魔歌に近いものなのかもしれない。

祈りを捧げるルカを包んだのはマナ。それも海の神ネレウスが司る水に属するものだ。ふわり、と薄い水色の光の抱擁にアルは僅かに目を細めた。

そしてその光は静かにルカの中に吸い込まれるようにして消える。

「ありがとうございました」

成人の儀を終えた後、ルカは二人に礼を言って教会を後にした。気配を感じて後ろを振り向くと自分を追って来る人物が見える。

白い神官服の少年、ジェイドである。普段運動をしない彼は、息

も絶え絶えといった感じで、見ているこっちが申し訳なく思ってしまう。

「ジェイド、どうかした？」

ジェイドの呼吸が落ち着くのを待つて尋ねる。わざわざ追い掛けて来るとは何かあったのだろうか。それとも忘れ物でも？

だが肩に乗ったアルを見る限り、それはない。もし何かを忘れていれば彼が絶対に気付くからだ。首を傾げるルカに、ジェイドはただ一言こう言った。

「……行くんだろ？」

どこにとは言わない。幼なじみで親友の彼等に多くの言葉は必要なかった。『世界を見てみたい』とルカは昔から言っていた。予感にはしていたのだ。きっと誰にも言うことなく旅立つのだろうと。核心をついた一言にルカは観念したように肩を竦めて見せる。

「やっぱりジェイドには隠しきれなかったね。うん、もう行こうと思ってる。皆が知れば見送りに来てくれるだろうけど。そうしたらさ……別れが寂しくなるから」

別れが印象的であればあるほど辛くなる。薄情だと言われるかもしれないけどルカは決めていた。誰にも言わずにエランディアを旅立つと。

アルもルカが決めたことなら何も言わないでいてくれたのだ。

「……そっか。なら僕だけでも見送るよ」

ルカとジェイドは笑い合うと、互いに何を言う訳でもなく並んで

歩き出す。行き先は時計塔。エランディアで一番高く広い場所である。

しかし普段あまり人が訪れることのない場所は、何故か多くの人で賑わっていた。

まだ見ぬ世界

「どうして。何も言っていないのに……」

「みんな、ルカ君が来たわよ」

呆然と呟くルカに対し、アルとジェイドは笑っていた。

とその時、人込みの中にいたヘンリエッタが、二人に気付いて声を上げる。見送りに来てくれたのは、ヘンリエッタだけではない。ルカと親しい者たちや友人、世話になった人たちもいる。いつもルカに遊んでとせがんで来る子供たちもいた。

「ルカの考えることはみんなお見通しと言っことかな」

「……俺ってそんなに分かりやすいのかな？」

『だろうな。でなければここに誰もいるはずがない』

ジェイドは笑いを堪えながらルカの方を向く。当の本人は驚いたような微妙な顔だ。

肩に乗るアルも笑みを隠そうともしなかった。

ルカは隠し事が上手いとはお世辞にも言えない。朝からそわそわしていれば尚更である。加えて今日は成人の儀。区切りを付けるのもってこいの日だからだ。

「ルカ君、たまには手紙ちょうだいね。貴方が留守の間はちゃんと掃除しておくわ。いつ帰って来ても困らないように」

ヘンリエッタはルカが黙っていたことについて何も言わない。

送り出してくれる人がいるのは、こんなにも嬉しいのだとルカは初めて知った。薄情だと怒られてもおかしく無いというのに、皆何も言わない。

例えばどこに行こうとも自分の故郷はこの街。帰るべき場所があるから頑張れる。きっとそうなのだろう。

「ヘンリエッタさん……ありがとう」

「気にしないで。こんなことお安いご用よ」

母が生きていたなら、ヘンリエッタのように笑って送り出してくれただろうか。

彼女は僅かに記憶に残る母のように温かくて、ルカは少しだけ泣きたくなった。

「ルカ、お前が帰って来るまでに一人前の菓子職人になるからな！ アルを唸らせるくらいになってやるから期待しとけ」

ルカ、声を掛けたのは赤掛かった茶の髪に白い調理服姿の少年。ルカの友人の一人ラルフである。菓子職人見習いである彼は幼い頃、ラルフは一人前の菓子職人に、ルカは冒険者になると約束した仲だった。

まだまだ一人前とは言えないが、それはルカも同じ。ラルフが一人前の菓子職人になるのなら、ルカは一人前の冒険者に。約束を忘れぬよう、心に刻みつける。

『それは楽しみだ。私を満足させてくれるのを待っている』

「アルも楽しみだってさ。でも俺も負けない。約束だからな」

ルカとラルフは絶妙なタイミングで互いに腕を付き合わせ不敵に笑う。そしてジェイドと同じように腕を合わせた。

次に会えるのはいつになるか分からない。けれど、三人とも変わっているのだろう。

「アル君、ルカ君を頼んだわよ」

『任せておけ』

ルカの肩から降りた彼の体を眩い光が包む。光がおさまった時には、小さな竜の姿はなく、見上げるほどに巨大な銀の竜が顕現していた。アル本来の姿である。

ルカを背に乗せたアルはゆっくりとその大きな皮膜の翼を広げた。

『いつてらっしやい』

「いつてきます！」

ルカの返事と共に、美しい銀色の竜はエランディアの空に舞い上がる。ルカは皆の姿が遠くなるまで眺め、この街で過ごした昔を思う。

少年は相棒の竜と共に故郷の街を旅立つ。まだ見ぬ世界に思いを馳せながら。

序奏 了

私は私に誓う

彼が見ているのは、自らの金色の瞳を通して見る“世界”だった。生きとし生ける者全てを照らす太陽の光、視界に入るのは海沿いの街道だ。いかにも穏やかな昼下がりと言った感じだが、彼等以外に旅人の姿はない。

それは一重に魔物の存在だ。自然に住む獣とは似て非なるもの。だがそれも彼にとっては驚異にすらなりえない。うたた寝しそうになるのを我慢し、ほんの十数年前に思いを馳せる。

永遠に近い時を生きて来た。理想郷の名で呼ばれるこの世界を見守っていた。誰にも知られるはずのない世界の果てで。

そう、あの子と会うまでは……。

人などとうに見限っていたつもりだった。だが一人の人の子がアルを変えた。

純粹に嬉しかったのだ。アルを家族と言ってくれたことが、必要としてくれたことが。

彼は『ではなく、“私”が生きる意味を与えてくれた。

だから私は私に誓う。此の命在る限り、お前の傍にいます。

「……ル！ アルってば！」

そこまで考えた所で彼——アルトウルは現実に戻された。目の前には呆れたルカの顔がある。きつとたた寝したと勘違いしているに違いない。名譽のために言うが、うたた寝はしていない。金色の目を細め、訝しげにこちらを見るルカを見返す。

『言つて置くがうたた寝など断じてしていないぞ』

言われる前に釘を刺しておいた。確かに寝そうにはなつたが未遂である。

ルカもそれ以上、追求するのは諦めたらしい。視線をアルから話し、ポーチをまさぐる。

「ならいいけど。あのさ、アルストロメリアってこの道であつて……よね？」

ルカは腰に付けてあるポーチから地図を取り出して眺める。アルも彼につられて身を乗り出して覗き込んだ。

何分地図など普段は見ることにすら無い訳で、今居る地点を把握しているのかさえ怪しいものだ。ルカたちが目指すアルストロメリアはエランディア周辺では最大の街であり、ギルドの中でも限られた、冒険者としての登録を受け付けている支部があつた。

魔奏士

完全に油断していた。男は悔し気に唇を噛んだ。

右腕からは血が滴り、感覚も無いに等しい。傍には自分が倒し、息絶えた数体の魔物が転がっている。

おかしい。これまでなら魔物が街道で人を襲うことは少なかったはず。こんな事なら一人でも連れてくればよかった。

だがそれももう遅い。狼に似た魔物が男を取り囲んでいた。一匹や二匹ではない、数が多い。もう少し少なければどうにか出来ただろうが、今の自分では無理だ。

どうにか活路を開こうと剣を構えた直後、声が聞こえた。淀みなく、滑らかに紡がれる旋律。歌なのだろうか。

『揺らめく光は黄泉への導、逆巻く炎は断罪^{つみ}の槍。其は誓いと祈りを知り、猛き焰の旋律^{しぐさ}へと誘う。朱は制約、血は誓約^{ちかい}。己が力を知り、魂を織^しる。無垢なる願いは届くことなく、果てなき天へと響くのみ』

その歌は何よりも澄んでいて、綺麗な歌だった。男が見上げると同時に飛来した短剣が魔物の眉間を穿つ。

まだ若い、十代も半ばの少年だった。水の色とも空の色ともまた違う透き通った青い髪、黒掛かった深紅の瞳は男にしては少し大きい。中性的な顔立ちの彼の肩には、ちょこんと銀色の何かが座っていた。

男に跳びかかるうとしていた魔物の体を少年が投擲した短剣が貫く。ぎゃう、と悲鳴を上げてのた打ち回る狼。

『遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。掲げた約束^{ちかい}を知るならば、今導きの声に応えよ——誓焰槍』

少年が掲げた手を囲むように描かれた複雑な真紅の紋様。魔物の身を撃ち貫いた灼熱の炎槍は、狼の体を灰すら残さず焼き尽くす。呆然とする男の前に少年が駆け寄って来た。

「大丈夫ですか!？」

『心配ない。傷は見た目ほど酷くはないぞ』

少年は、安心して思わず座り込んだ男を心配そうに見つめる。少年の肩に乗った何かが鳴き声を上げた。

銀色に煌く鱗を持つ竜。竜の鳴き声を聞いた少年、ル力はほっと胸を撫で下ろす。

「あ、ああ。君は魔奏士^{シンガー}なのか？」

竜族が扱う喪歌を簡略化させた魔歌^{ロストアリア}を操る者^{スヘルアリア}。
こんな年端もいかぬ少年が男を救ったのだ。

「はい。俺はル力と言います。すみません、少し傷の具合を見せてください」

男は頷き、黙って傷を見せる。見ず知らずの少年に傷を見せるなんて正気の沙汰ではないが、この少年は間違いなく男を救ったのだから。

命に関わる傷はないし、殆どが擦過傷だ。だが右腕の傷はかなり深い。魔物の牙の跡だろう。

ルカは傷口に掌を翳すと、意識を集中する。

『……救いを望み、全ての子らの安息を願う。遥かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。切なる祈りを知るならば、今導きの声に応えよ——治癒』

「あくまで応急処置ですから必ず医師にみせて下さい。絶対ですよ」

紡がれた魔歌と共に、とめどなく流れていた血が止まる。傷は大方塞がったが、自然治癒力を促進させたに過ぎない。

完全に治すことも可能である。しかしそれでは体に負荷が掛かるのだ。

「あの、ところでアルストロメリアってどう行けばいいですか……？」

街道を歩いていた二人だったが、血の臭いがする、と呟いたアルにルカは急いで駆け付けて来たのだった。

そのためどの道を来たのかまったく覚えてない。怖ず怖ずと尋ねるルカに男は快く頷いた。

安らぎの旋律

「えー……と。これは何なのかなあ？」

ルカは目の前の光景に言うべき言葉を見つけられずにいた。
やんややんやと繰り広げられる乱闘騒ぎ。空中を無数の皿が舞い、
酒瓶が飛ぶ。第三者が見れば何の祭りかと勘違いするだろう。

『私に聞くな。知るわけがないだろう』

肩に乗るアルに尋ねると、そっけない答えが返ってくる。真面目
に答える気もないのか、体を丸め、瞳を閉じていた。話しかけるな、
ということらしい。

腕に包帯を巻いた隣の男性が頭に手を当て、呆れたようにあるい
は情けないと言った感じでため息を付いた。

「すまない。乱闘騒ぎは滅多にないんだがな」

ルカが助けた彼はアーヴィンと名乗り、聞く所によると、アルス
トロメリアの冒険者組合、ハンタースギルド通称ギルドの受付らしい。

病院に付き添った後、ギルドまで案内して貰ったのだがこの有様
である。皆、ルカやアーヴィンに見向きもせず皿や料理を投げ合
う始末だ。

刹那、飛んで来た何かが、べしやり、とアルの顔に激突した。原
型を留めていないため、分からないが、パイ生地と肉から恐らくミ
ートパイらしい。

『……ふふふふ。あはははは。面白いぞ人間共。たわけが。私に喧

嘩を売るなど二千年早いわ!」

金色の瞳を開き、不敵に笑ったアルは肩を震わせている。ミートパイ塗れになったことが相当嫌だったようだ。

しかしながら、竜である彼が本気で怒ればギルドどころか、この街が壊滅してしまう。

よもや本気ではないだろうが、滅多に冗談を言わないアルである。テーブルにあったタオルでアルの体を拭きながら、ルカはアルを宥めにかかった。

「ま、まあまあ。落ち着いて。用はこの乱闘を止めさせればいいんだよね?」

「しかしこうなれば俺でも簡単に止められないぞ」

アーヴィンも困ったように頭を掻いている。

冒険者は血の気が多い者が大半らしく、止めろと言われてはいそ
うですかと止める奴がいるはずがない。

そもそも言われて止めるなら乱闘など起こっていないはずだ。

「大丈夫、大丈夫。俺に任せてよ」

魔歌は何も戦闘だけに使う訳ではない。ルカは任せてよ、と笑うと、息を吸い込み、歌いなれた旋律を口にした。

『星歌う、愛しい子らへの子守歌。その歌は母なる調べ、全てに通ずる安らぎの旋律。^{おと}星が奏でし原初の調べが染み渡る。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。優しき音色を知るならば、今導きの声に応えよ——潮騒』

それはまるで水晶を打ち鳴らしたかのように透明で澄んだ歌声。
美しい歌声に毒気を抜かれた者たちは次々に乱闘を止め、たおや
かな歌に聴き入った。

この魔歌は本来なら対象を眠らせるものなのだが、興奮している
者には効果がない。

だが乱闘を止めるには十分だろう。現に冒険者たちは固まったま
ま、互いに顔を見合わせている。

気の抜けた冒険者たちを見たアーヴィンがすかさず声を張り上げ
る。

「ほら皆、いい加減にしてさっさと片付けろ！」

お、アーヴィン帰ってきたのか、などと今正に気付いた者や、右
腕に巻かれた包帯を見て、怪我してるじゃねえかよ、と言う者もい
る。

男たちは渋々ながら倒れたテーブルと椅子をもとに戻し、散らば
っていたゴミや料理を片付け始めた。

「おかえりなさい、アーヴィン。怪我してるみたいだけど大丈夫？
それとこの坊やは？」

カウンター越しに声を掛けて来たのは、燃え上がる炎を思わせる
赤毛の女性。年の頃は恐らく二十代前半ほどだ。

胸元が大きく空き、大胆にスリットが入った真紅の服に、幾重も
付けた金の腕輪が甲高い音を立てる。一見すると踊り子にも見える
服装だが、カウンターにいるということは、受付なのだろう。

「ただいま、リリース。一週間は重い物を持つなって。ああ、この子
はルカ。危ない所を助けてもらってね」

アーヴィンは包帯が巻かれた腕を女性に見せると、後ろのル力たちを見やる。紹介されたル力は軽く会釈を返すと、リリスと呼ばれた女性はル力を見て淡く微笑した。

「そう、坊やがあの歌をね。私はリリス。彼と同じくギルドの受け付けよ」

「ごめん。本来の目的を忘れてた。登録なんだけど、まずはこの書類に記入してもらえるかな？」

アーヴィンがカウンターの奥から取り出したのは一枚の用紙。冒険者の登録と言っても簡単な書類審査とギルドから提示された依頼で判断される。

ル力は紙とペンを受け取り、カウンターに座った。
ル力が書類を埋める間、アルは邪魔をしないように肩から下りてテーブルに移動する。

「あら貴方、竜よね？　じゃあル力ちゃんドラゲナーは声を聞く者なのかしら？」

『その通りだ。だがお主もそうであろう？』

「私は力が弱いから駄目よ。ちゃんと聞こえない時もあるし」

あら、とリリスはル力の肩に乗ったアルを見た。ゆらゆらと尻尾を振りながら問うアルに、リリスは首を横に振る。

一口に声を聞く者と言っても、人によって力のムラがあるのだ。
リリスのように簡単な意志疎通しか出来ない者もいれば、ル力のように竜と心を通わせる者もいる。

イクセル・クライン

「出来ました」

「では君の試験を兼ねた依頼だが、少し特殊なものを頼みたい」

書類を書くこと訳十分。出された書類は本当に必要最低限のことだけで、直ぐに書き終わってアーヴィンに渡す。

書類を受け取ったアーヴィンが差し出したのは一枚の紙だった。

冒険者組合のクエストボードに張り付けられているのと同じものだ。

冒険者のランクによって受けられる依頼に違いがあり、紙に引かれたラインで区別出来る。

しかしこれには何のラインも引かれていなかった。試験を兼ねた依頼であるからだろう。

紙を受け取ったルカは依頼内容を見て目を見張った。ルカの肩からそれを見ていたアルは無言。

「依頼書を見て貰えば分かるが、この街とデウス村の中間に位置するアルセニスと言う山に一体の竜が住んでいる。しかしここ最近、彼の様子がおかしいらしい。話を聞こうにも、そう都合良く声を聞^{ドラグ}く者などいない、そう言う理由で見送られてたんだが、君なら可能と判断してね」

ある意味ではこの依頼がルカに回ってくるのは当然だろう。冒険者はそれほど星の数こそいるが、竜と心を通わせる声^{ドラグナー}を聞く者などそう都合よくいない。

竜はこの世界では人の隣人とされる生物だが、幼い頃からアルと接して来た彼には人が無意識に持つ竜へ恐れがない。

ルカにとって竜とは人間と同じであり、深い知性を持つ彼等より心ない人の方がよっぽど怖いのだ。

本来ならいくら声ドラクナを聞く者だとは言え、こんな年端もいかぬ少年を竜のもとに行かせるのは無謀もいところである。しかし彼の實力なら心配ないと判断したし、同行者もつけるつもりだった。

「もし危険だと判断したら即座に戻ることに。それと一人、ギルドの冒険者が同行する」

「分かりました。やらせて下さい」

「そいつの同行は俺がする」

アーヴィンから依頼書を受け取り、ポーチに入れたその時である。入口の方からこちらに誰かが歩いて来る。

まだ若い二十歳前後の青年だった。背中の半ば程まで伸びた艶やかな漆黒の髪、切れ長の瞳はアメジスト。目鼻立ちを整っているが、浮かべる不敵な笑いと聞こえた口調から上品とは言い難い。

白いシャツ以外は上着もズボンも黒であるため、まるで闇に溶けてしまいそう。

「い、イクセ！ どうしてお前がここに！？ いや、それはこの際どうでもいい。お前ほどの奴が同行する必要はないだろう！」

何故かアーヴィンが慌てた様子でルカと青年の間に割って入った。どうやらイクセと呼んだ彼と知り合いのようで、随分動揺しているようだ。

ルカは腰に差した二振りの剣が気になった。一本は普通の長剣。だが艶やかな黒塗りの鞘に納まったもう一本は僅かに反りがある。

普通の剣ではない。父に教えてもらった。確か刀、と呼ばれる剣だったはず。

「あの、お知り合いですか？」

「あ、うん。彼はイクセル・クライン。《黒呀》の二つ名で呼ばれる冒険者だ」
ハンター

このまま黙っていると話が進まなさそうなので、思いきって尋ねてみる。

ルカの思った通り、二人の視線がこちらに向いた。アーヴィンに紹介された青年は不敵な、あるいは皮肉めいた笑みを見せる。

ルカはその時、アルが少し目を細めたことに気付くことはなかった。

イクセルはルカが今まで会って来たどの人間とも違う、そんな感じがした。もし誰かに例えるなら……父に似ているのかもしれない。

「別に良いだろう。俺の気まぐれだと思っていればいい。おい、ルカだったか？ 行くぞ」

答えをいう前に、有無を言わず腕を掴まれる。引き離そうにも少年と青年では力が違うし、驚いてそこまで考えが至らない。アルに至っては諦めているのか、ルカの肩に乗ったままだった。

別にイクセルが同行するのが嫌な訳では無いが、唐突な展開に戸惑うのは当たり前である。

「えっ、あの、ちょっと……」

やっと我に返ったルカは長身の青年を見上げる。勿論、ルカの抗議は耳に入ることもなくイクセルは手を話してくれない。

アーヴィンとリリスは呆然と二人と一匹を見送った。

ルカの肩に乗ったまま、先程から一言も喋らなかったアルトゥー
ルは、人知れずため息を零す。

『やれやれ、ルカも厄介な者に気に入られたものだな』

恐らくはルカが魔歌を歌う所を見たのだろうが、一体どういうつ
もりなのか。ルカは良い人々に囲まれて育ったせい、少々無防備
な所がある。あまり人を疑うことをしないのだ。

あの男、イクセルと言ったか。何を考えているかは知らないが、
ルカに害をなすようならば許しはしない。

これから考えるとアルは少しだけ重い気分になった。

靈山の守護者

大概の人となら直ぐに打ち解けるルカだが、少しだけ緊張していた。それは彼が父に似ているからかもしれないし、まったく別の何かかもしれない。

アルストロメリアを出た二人と一匹は早速目的地に向かう。

しかしながらルカ自身にエランディア以外の土地勘は無いし、アルはそもそも歩かないので同様である。

そうなれば自動的に青年について行くことになるのだが、やはりただ者ではない。

重そうな靴を履いていると言うのに、全く足音がしないのだ。

おまけに鎧どころか鎖帷子すら着ている様子はなく、上着とシャツ一枚の動き易い軽装。見た感じでは得物は無造作に腰に下げた長剣と刀だろう。

どこまでも冒険者と言う常識から外れているのか。そもそも髪が長い辺りからしてそうだ。

さほど手入れはしていなさそうだが、艶やかな黒髪は風でゆらゆらと揺れている。

しかし普通、冒険者の男で髪を伸ばしている者はいない。長い髪、それを纏めもしないものは戦いでは邪魔だからだ。

「イクセルさん、でしたよね？」

「イクセでいい。それと敬語も必要ないからな」

おずおずと名を呼ぶと、イクセル、否、イクセは唇の端を上げて笑う。敬語も必要ない、と。

折角の整った顔立ちなのだが、皮肉めいた笑みのお陰で若干物騒に見える。

本人が敬語は必要ないと言つのなら、ルカが無理をして敬語を使う必要もないだろう。

緊張した面持ちでイクセを見上げる。

「分かりまし……じゃなくて分かった。イクセ、これでいい？」

『イクセル、お前は声を聞く者としての力は強いようだな。まあ、ルカには及ばんが』
ドラクナー

正直な話、ルカも敬語は苦手だ。気を使っているようだし、何だかくすぐったかった。ドラクナー 声を聞く者だと初めはイクセを褒めたものの、最後に取って付けたのはアルらしい。

しかし驚いたのは当の本人ではなく、隣を歩くルカである。

「えっ、イクセって声を聞く者だったんだ」
ドラクナー

アルが話していても気にした様子はなかったし、ルカとアルの会話にも特に反応していなかった。てつきり声ドラクナーを聞く者ではないと思っていたのである。

ルカの予想外の一言にアルとイクセが笑い出したのは同時だった。普段なら文句なく勘が良い少年は意外に鈍いらしい。

「ここに竜が住んでるんだよね？ でもどこに居るんだろ」

暫く歩いたルカたちは目的地に辿りつく。アルストロメリアとデウスの間中に位置する霊山は、厳かに三人を迎えていた。

見上げる山は遥か高く、頂上付近は深い雲で覆われている。かなり高いのだろう。

この山、アルセニスは古くから大地を司る神、クロノスが宿るとされ、地元の人々から崇められてきた。

そしていつの頃からか、この山に住む竜を恐れ、あるいは敬い、守護者と呼ぶようになったのだ。

アーヴィンの話では竜は、麓付近にいる事が多いというが、竜どころか動物すら見つからない。

先ほどまで晴れていたと言うのに、澄んだ青は全てを塗りつぶす灰色へと変わっていた。

『その必要は無い。お出ましのようだ』

アルが口を開いた瞬間、ルカの周りだけが暗くなった。刹那、目を開けていられないほどの突風が巻き起こり、何かが羽ばたく音が耳に届く。

「守護者と言われるのもあながち間違じゃないってか」

呟くイクセを彩るのは、やはり皮肉めいた笑みだ。

現れたのは強大な竜。ルカが両手を広げてても到底足りない。鞭を思わせるしなやかな尾に、皮膜の翼は蝙蝠に似てはいるが全く違う力強さに溢れている。

見るからに硬そうな真紅の鱗は光沢を放ち、一際存在感を示していた。

頭部から生える角はルビーの結晶を思わせる。

竜は燃え盛る炎に似た宝石のような瞳を三人に向けた。

『何者だ？』

ただ、ただ一言。その一言が空気を震わせる。だが不思議と恐怖は感じなかった。問答無用で襲って来ることもなく、見る限りでは様子がおかしいとは思えない。

しかしこれは冒険者組合の正式な依頼である。ハンターズギルド

「俺はルカ・エアハートと言います。実はギルドの依頼で貴方の様子がおかしいと聞いて……」

ルカは名乗ると、正直に事の次第を話した。偽っても仕方の無いことだし、何よりルカはそんな事をしたくない。

声からして彼、だろうが、普通の人間なら彼を相手にしてこうも落ち着いてはいられまい。

威圧的ではないが、強大な竜に見下ろされて恐怖を感じない者の方が少ないからだ。鋭い牙や長く伸びた爪は本能的な恐怖を呼び起こす。

『我はシャーレン。この地に住む竜だ。悪い事は言わん。人の子よ、今すぐ此処を立ち去るが良い……死にたくなければな』

相手も予想外のルカの反応に驚いたように目を細める。ただアルだけは何かを感じたようで静かに首を振った。

シャーレンが発した言葉は決して自らが望んだものではない。少なくともルカは間違いないと思う。

何故ならシャーレンは拒絶しながらも訴え掛けるような、それでいて助けを求めているような悲痛な瞳をしていたからだ。

お前が望むなら

「理由を聞かせて。これが依頼である以上、そう簡単に帰る訳には行かないんだ」

ルカはシャーレンから目を逸らすことはない。

口に出した言葉は建前だった。ルカの本音は別にある。依頼も理由の一つではあるが、どうしても彼の口から聞きたかったのだ。

シャーレンは何故、ここから立ち去れと言っただろう。

ルカの瞳をじっと見つめていたシャーレンだったが、

『早く立ち去れ……ぐ……あ』

言葉が途切れ、竜の巨体が傾く。

シャーレンは苦しげに呼吸を繰り返し、見えない何かに耐えるように地面に爪を突き立てている。明らかに普通ではない。そんなシャーレンを心配してルカが駆け寄るが、返った来たのは拒絶だった。

『く……るな』

『ルカ、様子が変だ。気をつける』

シャーレンの声は呻き声に近いが、はっきりとルカを拒絶している。肩に乗ったアルが気をつけると言ってもルカは一向に離れようとはしない。

様子がおかしいことは分かっていた。けれど、苦しげなシャーレンを放っておくことなど出来なかった。

「分かってる。でも……」

「離れる！」

言い終わる前にルカの体は強い力で引き寄せられる。それと同時にルカが居た場所をシャーレンの爪が凧いだ。イクセが引き寄せてくれないければルカも無事で済まなかっただろう。

だが、無事だったのはルカとアルだけ。イクセの左腕には切り裂かれたような傷があり、黒い服を濡らしていた。

ルカを庇ったせいだ。イクセは痛み顔に顔をしかめながらも竜から視線は逸らさない。揺らめく炎を思わせる瞳は爛々と光り輝いている。

「イクセっ！」

「大丈夫だ。それより……」

イクセは左腕を押さえたまま、いつでも戦えるように腰の剣に手を添える。アルはルカの肩に乗ったまま、沈黙を守っていた。

真紅の竜は抑え切れない激情に堪えるように、何度も何度も地面に頭を打ち付ける。

それこそ狂ったように。一体、彼の身に何が起きているのだらう。

イクセに庇われたルカが思わず声を上げるが、果たしてシャーレンに届いているかどうか。

「シャーレン！」

『頼……む。逃げて……くれ。我はもう……自分で命を絶つことも出来ぬ……。叶うなら、我が……我である内に……殺して、くれ』

自由にならない体を押さえつけ、シャーレンは懇願するように頭を下げる。

余程強く噛み締めていたのだろう。口から一筋、鮮血が流れ落ちた。

今は辛うじて彼の理性が残っているから良いものの、それもいつまでもつか。

もはや我は自分で命を絶つことすら出来ぬ身。ならばせめて殺してくれ、とシャーレンは言う。

けれど、ルカは諦めたくはなかった。

彼に何が起こっているのかルカには分からない。だが、だからと言ってシャーレンの言葉に従うことは出来なかった。

会ったばかりだとか、そんなことは関係ないのだ。ルカにとって竜は『友達』だから。友達を助けたいと思うのは当たり前ではないのだろうか。

「そんなの嫌だ！　どうしてそんな簡単に諦めるの!？」

『ルカはそんな人間なのだ。霊山を護りし竜よ』

シャーレンの頭の中に響いた声は、少年の肩に乗った小さな竜の声だった。

今まで意識すらしていなかった小さな存在。

どうやら竜の声は人の子たちに聞こえてないようで、銀色の竜は真っ直ぐにシャーレンを見据えている。

どうして今まで気づかなかったのだろう。いや、気づけなかったのだろう。『彼』の存在に。

『貴方様は……白銀の君』

「どうする、ルカ？」

肩に乗るアルが静かに問うた。イクセは何も言わず、ただ一人と一匹を見つめている。

「……どうにかして助けられないの？」

目の前で苦しむ彼を、命を絶つことでしか救えないのだろうか。自分はなんて無力なのだ。シャーレンにしてあげられることが一つもない。この間にもシャーレンは必死に自らを苛む激情に耐えている。

ルカは血が滲むほど強く右手を握り締め、縋るようにアルを見た。

『私にもあの者を助ける術は分からぬ。そしてこのままではいずれ……。無理をするな。お前が辛いのなら私が代わっても良いのだぞ』

返ってきたのは半ば予想していた答えだった。彼が正気を失うのは時間の問題だ。助ける方法が分からない以上、今ここで命を絶たねば、多くの被害が出る。シャーレンもそれを望んでいるのだ。

だがアルは出来れば、ルカに命という重荷を背負わせたく無かった。

勝手だとは分かっている。それでもアルトウールに取ってルカは何をしてでも守りたい存在だった。

『殺し……くれ』

「……それがシャーレンの願いなら。ごめんアル、力を貸して」

人は竜に比べあまりに脆弱な存在だ。生半可な魔歌では竜には通

スベルアリア

じない。何故なら魔歌は竜の喪歌を元にしたもの。元は彼らが操る術なのだから。今のルカでは彼を傷つけることは出来ても、命を絶つことは出来ない。むしろ苦しみを長引かせるだけだろう。

それでもアルが力を貸してくれるなら、何とかなる。ルカが隣のアルを見ると、家族であり親友でもある竜は一にもなく了承した。

『お前がそう望むのなら』

「シャーレン!？」

唐突に向けられた鞭のような尾の一撃をルカは、辛うじて身を捻ってかわした。

先程まで苦汁の表情を浮かべていたシャーレンはもうない。今の彼は理性の欠片もない獰猛な瞳をしており、天を衝くほどに猛々しい咆哮を上げた。

まずい。ルカが歌おうとしている魔歌は、普通の魔歌ではない。極度の集中を要するため、攻撃を避けながらはとても無理だ。

『どうすれば……』

「お前の歌が完成するまで俺が引き受けてやる」

唐突に口を開いたのはイクセだった。

だがシャーレンの一撃を受けた利き手は大丈夫なのだろうか。ルカの心配をよそに、イクセの顔には彼らしい不敵な笑みが浮かんでいる。自分を信じろということらしい。彼が信用に足る人物であると、ルカはとづくに理解していた。

「イクセ……ありがとう」

二重唱

本来なら、ルカに付き合う必要はないのだろう。イクセの役目は見届けることと、万が一の護衛だ。竜と戦うことは依頼には入っていない。

しかし、この少年に付き合ってみたくなったのだ。自分が失ってしまったものを持つ彼に。

イクセは利き手と逆の右手で、愛用の剣を抜き放った。

普通の武器では竜に傷を付けることすら難しい。

魔歌による攻撃も武器よりは有効だが、高位の竜となれば人の器では必ずしも有効とは言えないのだ。

そう思っていたイクセだが、聞こえて来た歌に表情を変えた。ルカとアルが同時に歌っている。それも良く似た、だがまったく違う歌。

「玲瓏たる凍鳴。其の色彩は契約の証、許されぬ永久の夢。齋すは、承継無き終焉のみ。愛し子は揺り籠の中で眠り、来る事の無い明日を夢見る」

『壮美なる蒼氷。其の色彩は停滞の証、繰り返される刹那の夢。齋すは、風化すら赦さぬ停止のみ。愛し子は夢見りより目覚めず、自らの運命を識ることもなし』

彼等が歌うは不思議な魔歌だった。似て非なる言の葉。考えなくともルカとアルがどれ程互いに信頼しているのかが分かる。

それは二重唱と呼ばれるもので、二人の魔奏士が共に別々の歌を歌い、一つの特異な魔歌を紡ぐ詠唱法である。竜と比べ、力に劣る人が生み出したものだ。

発動すれば非常に強力なのだが、その反面、魔奏士^{シンガー}同士の相性が悪かったり、息が合わなければ暴走する危険もあった。

心地良い歌を聞きながらイクセは跳躍し、爪の一撃を剣で受け流した。ただの一撃が圧倒的に重い。

しかしイクセの役目は彼を倒すことではないのだ。動きに注意を払えば見切れぬ速さではなかった。動きが滅茶苦茶で読みづらくはあるが、これくらいということはない。

「遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。折れぬ心を知るならば、今導きの声に応えよ——絶対氷結」

『遙かな咆哮^{こえ}は世界に響き、世界は声に満たされる。砕けぬ心を知るならば、今我が導きに応えよ——絶対氷結』

イクセが離れた一瞬の内に歌が完成する。それと同時に肌を刺すような冷気が辺りを満たした。

ルカとアルを中心に渦巻く強大な魔力。二人とシャーレンの足元に円状の紋様が描き出される。同時に一気に周囲の温度が下がった。吐息が、空気が凍りつき、草も木も、あらゆる物が白く染まる。それは全てを氷結させる氷姫の吐息。

『絶対氷結』

詠唱の完成と共に、シャーレンの足元に描かれた光の紋様から隆起する数多の氷柱。鋭く尖ったそれは氷というより槍のよう。

隆起した氷は強靱な筈の竜の鱗を安々と貫き、地面に縫い止める。シャーレンから抑え切れない悲鳴が上がった。まるで磔にされた罪人のよう。

イクセもシャーレンから離れていると言っのに、流れて来た冷氣

が肌を刺すように痛い。

真紅の竜を貫いた氷はやがて強大な氷の棺となって竜を包む。

「……ごめん。俺が不甲斐ないばかりに。これで終わらせるよ」

泣いてなどいられない。ルカの呼び掛けに、棺は甲高い音を立てると、無数の氷片となって砕け散った。空中を舞う氷片が陽光を受けてきらきらと輝く。ダイヤモンドダストと呼ばれる現象だ。

あまりに幻想的な光景に、イクセの口から感嘆の声が漏れた。崩れるように倒れたシャーレンから断末魔の叫びがこぼれ落ちる。

『……』

最後に彼は何か言おうとしたが、それは言葉にはならなかった。炎を思わせる瞳が静かに目が閉じられる。命の灯が消えたシャーレンの体は、光の粒となって立ち上った。

純粋なマナによって構成される竜族は、死ねば体はマナに還元され、大気に溶けるのだ。それは世界と一つになるということに他ならない。

沈黙が場を満たす。ルカもイクセも喋ろうとはしない。

アルは視線をルカから外したまま、ゆっくり口を開いた。

『ルカ、これはあの者自身が願ったことだ。最後に自らの命の使い道をお前に預けた。ルカが気に病むことも自分を責める必要もない。……だがシャーレンに代わって礼を言う。ありがとう』

この心優しい少年は自らを責めるだろう。

それでもアルは知っておいて欲しいのだ。誰に強要されたわけでもない。彼は自分の意志で命の使い道を選んだのだと。

だからどうかルカには笑っていて欲しい。身勝手な思いだと知っても。

「だけど……」

『お前はそう言うかもしれないが、私たちのために泣いてくれる。それだけで尊いのだ。だが、泣かないでくれ、ルカ。私はお前が泣いているのは苦手だ』

ルカの赤い瞳から一筋の涙が零れ、白い頬を濡らした。

我ながら情けないと思う。もう成人を迎えたと言うのにこれでは子供ではないか。

自分たちのために泣いてくれる。それだけで尊いのだとアルは言う。人も竜も同じだとルカは思っている。

人だから、竜だから、は関係ないのだ。

「お前はよくやったよ」

近付いて来たイクセが乱暴にルカの頭を撫でる。

その仕種が父にそっくりで余計に涙が出そうになった。

魔水晶

果たして、自分の行動は正しかったのだろうか。確かにシャーレンは死を望んだ。

だが他に何か方法があつたのではないか。命を奪う以外に彼を救う術があつたのではないか。

そう考えずにはられない。

アルは何も言わなかった。金色の瞳を閉じ、ルカに身を寄せている。悲しみを少しでもやわらげるように、あるいは悲しみを分かち合うように。

ひとしきり泣いた後、涙を拭う。いつまでも泣いてはいられなかった。泣いてはシャーレンに申し訳が立たない。

ルカがふと下を見た時だ。シャーレンが消えた場所で光る何か。

「あれは……？」

近付いて見てみると、それはちょうど手に収まるくらいの結晶だった。

煙水晶に似た、だがそれよりも昏い色をしている。

ただの結晶ではないことはルカにも分かった。結晶からは力を感じるので。

『これは……おかしい』

ルカの肩に乗ったまま結晶を見つめていたアルが口を開いた。心なしか声が硬い。何がおかしいのだろう。

見れば黙ったままのイクセも複雑な表情をしている。

「えっ？」

『竜族が純粋なマナから構成されるのは知っているだろう。だからこそ我等はマナを糧にするのだが……竜が死した時に残る物。それが竜の魔力とマナが結晶化した魔水晶だ。だが……』

竜は食事を必要としない。世界に漂うマナを取り込んでエネルギーとするのだ。

竜が死した時、体はマナへと還る。しかし唯一残されるものがあった。

それが竜の魔力と体内に取り込んだマナが結晶化した魔水晶と呼ばれるもの。ルカも魔水晶自体は知っている。けれど、気づけなかった。

魔水晶は単体で凄まじい力を秘めている。何せ、竜の魔力が結晶化したものだ。貴重で中々手に入らないが、人の魔歌を強化するこスベルアリアとが出来る。

だが問題はそれではない。シャーレンの魔水晶は『違う』のだ。

「俺もあまり見た事は無いんだが、魔水晶は確か乳白色か透明だったと思う」

『……そうだ。本来なら無色透明であるか乳白色。こんな色は私も初めて見た』

押し黙ったアルの言葉を継ぐように、イクセが口を開く。

魔水晶は本来、無色透明か乳白色のどちらかである。黒は存在しない。だというのに、シャーレンの魔水晶はどう見ても煙水晶のような色をしていた。

ルカが転がった魔水晶を拾おうと触れた途端、水晶に蜘蛛の巣状の亀裂が入る。

「何？ ひびが……」

突然現れた亀裂に驚き、直ぐに手を引つ込めた。
だが次の瞬間、硝子が割れるような甲高い音を立て、魔水晶が四散する。

ただ触れただけなのに。

ルカが答えを求めるようにアルを見ると、彼は驚きに目を見開いていた。

アルがここまで動揺した姿をルカも見ることがない。

『馬鹿な……。触れただけで砕け散る筈がない』

魔水晶の強度は折り紙つきで、地面に叩きつけたくらいではひびも入らない。普通の武器では傷を付けるのがやっとだ。

しかし現に魔水晶は触れただけで砕け散った。あり得ないことばかりである。それが意味するものは……？

「……ここでこうしている訳にも行かないだろう。とりあえずアルストロメリアに戻るぞ。ルカ、一応欠片は拾っとけ」

『……分かっている』

「う、うん」

イクセの言う通り、長居は無用だ。いつまでもここにいて出来ることはないし、ギルドへの報告もある。何にしても一度アルストロメリアに戻るしかないだろう。

ルカは魔水晶の欠片を拾い、腰のポーチに仕舞う。ルカもアルも、そしてイクセも釈然としない思いを抱えながら霊山を後にした。

銀色の青年

アルストロメリアに着いた時には、既に太陽は西に沈み掛けていた。

直ぐそこには夕闇が迫り、オレンジの光がアルストロメリアの街並みを照らしている。

昼間は人で賑わっていた大通りも、夕刻であるからかやはり人通りは少ない。

既に露店は畳まれ、街には明かりが灯り始めていた。

多くの家々から煙が立ち上り、夕食時を知らせるように食欲をそそる香りが鼻孔をくすぐる。広場で遊んでいた子供たちも仲良く帰路に着く。

子供たちの無邪気な笑い声が響いていた。

ルカは街に着いてから何をしたのか、あまり覚えていない。

ギルドに行つて報告をすれば、アーヴィンやリリスは怒りながらも、よく無事だったと喜んでくれた。冒険者としての正式な手続きは明日でなければ出来ないと聞いた覚えがある。
その理由を聞いた気もするが思い出せない。

ルカは一言二言、言葉を交わしてイクセと別れ、酒場と宿を兼ねた宿屋にチェックインした。

そこでアルと一緒に早めの夕食を取り、シャワーを浴びたルカは勢いよくベッドにダイブする。白いシーツは太陽の香りがして気持ちいい。枕に顔を埋めていると、

『ルカ、せめて髪はちゃんと拭いてから寝ろ』

そんなアルの言葉も耳に入らない。一分と経たない内に健やかな
寝息を立て始める。

アルはルカの寝付きの良さに半ば呆れ、感心しつつもブランケット
を掛けてやった。

勿論、口で挟んで、だが。

牙を立てて破かなかったただけ上出来だ。

「……ごめ……ん」

身じろぎしたルカの瞼が震え、頬に涙が伝う。

アルやイクセの手前、気丈に振る舞ってはいたようだが、やはり
辛かったのだろう。

痛ましげに顔を伏せたアルの体が光に包まれる。一瞬の後、アル
がいた場所には長身瘦躯の青年の姿があった。

年の頃は恐らく二十歳前後。恐ろしく整った顔立ちの青年だ。否
の打ち所がない美貌は、とても人間的ではない。艶やかな光沢を放
つ銀色の髪は長く、腰近くまで伸びている。服装は白い布が何重に
も折り重なったようなローブで、幾つもの金の留具があしらわれて
いた。

ルカを見下ろす瞳は、猫のような縦長の瞳孔に煌く金色をしてい
る。

青年はベッドの側にしゃがみこむと、長い指でそつとルカの涙を
掬い取ってやった。

本当に優しい少年だ。会ったばかりの竜の死をこれほどまでに悲
しんでくれる。

空よりも青く、海よりも透き通った美しい魂を持つ少年。
その魂に心惹かれた。

「ルカ……」

ルカの名を呟いたきり、青年は喋ろうとはしない。ただルカを慈しみに満ちた眼差しで見つめているだけ。

その時、青年の耳に控えめなノックの音が届いた。

一応ノックはしたものの、返事が来るまで入らないというのはイクセの柄ではない。

しかし、いざドアを開けてみると、見知らぬ青年の姿があるだけだ。

部屋を間違えたかもしれない。イクセが急いでドアを閉めようと腕を引き掛けた時、おもむろに銀色の青年が口を開いた。

「部屋は合っているぞ、イクセル」

「……もしかしくてもアルか？」

銀糸を紡いだような髪に黄金の瞳。人ならざる美貌を持つ彼に見覚えはない。

知らない人物に名前を呼ばれ、イクセは目が点になる。

だがこの尊大な物言い、そして合っているという言葉。二つを照合すると答えは自ずと出た。

イクセの確信を突いた問い掛けに、青年は猫のような金の瞳を瞬かせ、驚いた顔を作った。青年——アルは頷き、イクセを見返す。

「ああ。……驚かないのか？」

「そりゃあまあ、でも驚いたってどうにかなる訳じゃないだろう？」

生憎と非常識なことには慣れている。冒険者なら日常茶飯事だ。
ハンター

いちいち動揺していは身が持たない。

別に竜が人間になったらかと言って、それは驚くが、騒ぐほどイクセは馬鹿ではないのだ。

第一、騒いだところで解決するはずもなく、むしろ余計に話がややこしくなるだけである。

それともイクセル・クラインを舐めているのか。

「それは……そうだが、しかしそう簡単な問題でもないだろうに。お前は本当におかしな人間だ」

会った時から思っていたこと。このイクセルという人間はルカとは少し違うが、良い意味で常識外れなのだ。

竜の強大な力に対して、脅威は覚えているだろうが、恐れる素振りもない。現にアルが人の姿になってもこの態度である。

やはり人という生き物は、個体差が激しいとアルは思う。ルカやイクセのように竜族と友好的な関係を築く者も居れば、あからさまに畏怖や恐慌といった感情をぶつけて来る者も沢山居る。

それは竜族が人の良き隣人と呼ばれるようになった現在でも変わらない。人の中に根強く残っている感情なのだ。

アルには正確な理由は分らないが、人というものは自分と違うものを排斥し、拒絶する。

おまけに同じ種族でありながらも、肌や髪、瞳の色などで争う彼らだ。竜は人よりも強大な力を有する上に生物としても、全く人間とは違う。

人が竜を恐れるのも、ある意味では仕方のないことなのだろう。そして何より、人自身が自分達よりも竜を上位の種族だと考えているからなのかもしれない。

「おかしいとは失礼だな。寛容だと言ってくれ、寛容と」

少しだけ不満そうに唇を尖らせるイクセ。そんな彼を見てアルは小さく笑う。

本当に人間が彼やルカのような者たちならいい。

そうすればアルトゥールは何の疑問もなく世界を愛していただろうに。

だがそうなるには彼は永い時を生き過ぎており、人の愚かさと醜さを知り過ぎていた。

共に歩む者ならば

「そうだな。お前は本当に寛容だよ。イクセル」

他の人間に比べて恐ろしくな、とアルは続ける。ルカや彼の父、ゲイルにイクセル、そしてエランディアの人々は別だが、アルトゥールはそれほど人を好いているわけではない。

彼らのように素晴らしい人々に出会わなければアルはずっと人間を好きになれなかっただろう。

聡いイクセは何か彼の含みに気付いたらしく、微妙な顔をしている。一応、アルなりに褒めたつもりではあったが、どうも分かりづらかったらしい。

何とも言えない顔をして頭を掻いている。

「竜の考えはわかんねえな」

そんなイクセを見て小さく笑った時、アルは激しい痛みを胸を押さえて蹲る。とても言葉では言い表わせないほどの痛みだ。まるで体を串刺しにされるような痛みに立ち上がれない。

同時に頭の中に流れこんでくる映像。

今は狼狽えるイクセの姿も目に入らなかった。頭に浮かんだその映像を食い入るように見つめていることしか出来ない。

「おい、どうした!？」

切羽詰まったイクセの声も耳に入らなかった。見えるのは魔水晶が煌く幻想的な洞窟。そして蒼穹色の鱗を持つ竜と対峙する、黒い外套を纏った人間。

ローブの人物から紡ぎ出された旋律は、痛みに朦朧とするアルの意識を覚醒させるには十分だった。

信じられなかった。だがこれは現実だ。『彼』がもっとも近くにいた自分に助けを求めた、ということではないだろうが。

ドラゴンスレイヤー
「滅竜歌……だと」

ドラゴンスレイヤー
「滅……竜歌？」

ドラゴンスレイヤー
滅竜歌。その名すら忘れ去られた魔歌である。遙か昔、竜を滅ぼすためだけに人間が編み出した、だが千年も前に廃れたはずの失伝魔法。

歌える人間がいるはずはない。そう、絶対に。
ドラゴンスレイヤー
けれど、脳裏に響いた魔歌は間違いなく竜を滅ぼす滅竜歌。

彼らしくない狼狽した様子のアルは、まるでイクセが目に入っていないかのよう。

金の瞳も焦点が合っていない。ここでは無い虚空を見つめているだけだ。イクセが両手でアルの肩を掴んで揺さぶると、虚ろだった瞳にも輝きが戻って来る。

「おいっ！ アル！！」

「……私は大丈夫だ。静かにしろ。ル力が起きる」

顔を上げたアルは蒼白と言っている。

だがアルの抑揚の無い口調からは、質問は一切受け付けられないという堅い意志がはっきりと滲み出ていた。

大丈夫だと言ってイクセの助けを拒み、一人で立ち上がる。何も無いよう装っているが、何も無いはずがない。

アルが倒れかけた理由も分からず、滅竜歌という不吉な単語のことも分らないのだ。

「何を考えてる？」

黙り込んだアルを見て、思わずイクセの口をついて出た言葉。しまったと思った時には既に遅い。

だが先程のアルが見せた顔。悲壮な決意といえいいのだろうか。何故かは分からない。彼は最も大切にしているであろうル力を置いて行くような気がした。

その時、寝ている少年にアルが一瞬だけ視線を向けたのをイクセは見逃さなかった。

アルは答えない。憂いを帯びた表情で何も言うことなく、窓の外を見据えている。彼はその金の瞳に風景ではない何を映しているのだろうか。

「……こいつを、ル力を置いて行くつもりなのか？」

予想すらしなかったイクセの言葉に、微動だにしなかった青年が僅かに目を見張った。

しかし反応はしたものの、アルは口を閉ざしたまま。

だが否定もしない沈黙は肯定しているのと同じであった。

この一日、見てきた竜ならば、本当に何も無いのなら真っ先に否定するだろう。それがル力のことなら尚更だ。

「俺にはお前の考えていることは分からないし、事情も知らない。だが何故だ？ ル力はお前にとって大切な存在じゃないのか？」

イクセはただの冒険者で彼らのことをよく知らない。
ハンター

だがこの一日、行動を共にしたアルならばあり得ないことは真つ先に否定するはず。

否定も肯定もしない沈黙。それこそが肯定である証だった。

「……言うまでもなくそうだ。だが私と共に行けば十中八九、命の危険に曝されるだろう。そうと分かっているル力を連れて行くことなど私には出来ない」

暫しの沈黙の後、アルはまるで搾り出すように、あるいは自らに言い聞かせるように答えた。

イクセもアルの言いたいことは分からないではない。アルにとってル力は『全て』なのだろう。

これはル力から聞いた話だが、ル力はアルと三歳の時から一緒に居るのだという。ではもし家族同然の彼が突然居なくなったら、ル力は何を思うだろう。

「危険だと言うのならお前が共に居て守ればいい。どうしてもそんな簡単な事が分からないんだ。ル力はきつとお前に置いて行かれたと泣くだろう。少しは置いて行かれる者の気持ちを考えたらどうだ。……それとも俺の言っている事は間違ってるか？」

勿論、残して行く方も辛いだろう。

だがイクセは置いて行かれる者の悲哀を知っている。はじめは明確な理由も分からず、まるで世界にたった一人残されたような孤独感に苛まれた。

何故、何故自分を残して命を絶ったのか。

大切だからこそ傍を離れた？ そんな理由、慰めにもならない。

本当に大切ならば傍に居て欲しかった。共に生きて欲しかった。何故理解^{わかって}くれなかったのか。

物好きな人間

「いいや。これはただの私の我が儘だ。そうだな……私は何を恐れていたのだろうか」

アルは優しい手つきでルカの髪に触れた。銀色の長い髪に隠れて彼の表情は見えない。

彼ら竜族は長き時を生きる種族な訳だから、彼もイクセの何十倍も生きている計算になる。それは全て理解した上で出した決断なのかもしれない。

どんなに言葉を重ねてもイクセは部外者だ。彼らには彼らの事情がある。

一瞬だけ軽はずみな事を口にしたかと後悔したが、ならば尚の事、イクセが言おうとした意味が分かるのではないか。

「なら問題ないだろ？ それに俺も付き合っから心配するな」

誰もが見惚れる笑みを作ったイクセは、アルが全くもって予想していなかった一言をあっけらかんと言いつ放った。

アルが言葉の意味を理解する間、たつぷりと痛いくらいの沈黙が続く。

やっとイクセが言わんとした事を理解し、アルは盛大なため息をついた後、失笑とも苦笑ともつかない微妙な表情を浮かべた。

「まさかそんな事を言い到此まで来たのか？」

「ああ。なんだ、おかしいか？」

イクセはついさつき自分を説教した人物と同一人物とは思えないほど間抜けな顔をしている。

イクセにすればル力は久々に気に入った人物だし、旅は道連れだと誰かが言っていたものだ。

それに普段は同業者と積極的に関わらないが、興味がある、と言えればいいだろうか。

「ああ、おかしいな。物好きな人間もいたものだ。ル力を気に入ったようだが、あまりル力で遊んでくれるなよ？ お前と違って純粋なのだからな」

そう言って笑うアルは、どこか楽しそうだ。

しかし失礼ではないか。ル力は純粋でイクセは違うといたいのだろう。確かにその通りだが、わざわざ指摘する所でもないだろうに。

人間、というかル力に近づく者には割と嫌味をよく言うのかも知れない。どの道、この竜に逆らうつもりはなかった。先ほどのように動揺している時ならまだしも、今はとても口では敵いそうにない。

「へいへい。どうせ俺は純粋じゃありませんよ。そもそも十九にもなって純粋はないだろ」

かといってこのまま部屋に戻るのも癪だ。

反論を忘れずに言うとまた明日な、とイクセは部屋を後にした。

ドアが閉まる音を確認してアルは元の姿に戻り、ル力の枕元で身を丸める。

健やかな寝息を立てる少年が起きる気配はない。

目を閉じたところでイクセに言われたことが蘇る。思い知らされた気がした。やはり人と竜は違うと。

人と共に生き、暮らすようになって自分たちは違う存在だ。^{ルカ}

彼と生きることであれかけていた使命。

これはきつと警告だ。身の程を弁えず、たった一つの存在に心奪^{アルトゥール}われた自分への。

いくら鳥籠から出ようとしても叶わない。何故なら飛び立つための翼は既に絡め取られているのだから。

第一奏 了

旅は道連れ

深いまどろみの中でルカは二人の人間の声を聞いていた。

誰が誰を置いて行く？ 命の危険？ 一人はイクセの声だ。もう一人は……誰なのだろう。聞いたことのない声。だけどどこか懐かしい。

会話の内容は耳には入って来る。ただ覚醒していない頭では理解出来ないだけだ。

やがてドアが閉まる音を境に、部屋は静けさに包まれた。薄れ行く意識の中で誰かが優しく頭を撫でた気がした。

瞼をさす光で目が覚める。ゆっくりと目を開ければ朝日が眩しい。目が光に慣れ、真っ先に視界に入った白い天井。故郷エランディアではないのだ。アルストロメリアの宿屋である。

昨日の夜は色々あったせいか直ぐに眠ってしまったらしい。ルカが上体を起こすと、アルは既に起きていて、窓際に座って外の景色を眺めていた。

それなのに何故か不安になる。金色の瞳を外に向けた彼は景色ではないどこかを見ているよう。不安になり、思わず親友の名を呼ぶ。

「アル？」

『ん？ 起きたのか？』

振り向いたアルは、ぱたぱたと翼を羽ばたかせ、定位置であるルカの肩に乗った。

こちらを見るアルは普段と何ら変わらない。気のせいだったのだろうか。

今のアルはちゃんと目の前を、ルカを見ている。

「うん。……朝ご飯食べに行こうか」

気のせいだったのかもれない。

深く考えるのはよそう、とルカはベッドから起き上がり、背伸びをする。身支度を整えると一階に向かう。

食堂に着いたルカは正に目が点になった。昨日別れたはずのイクセがカウンター席に座って手を上げていたからである。

着崩した黒い服に、腰には長剣と刀と呼ばれる不思議な剣。艶やかな長い黒髪をこめかみ付近の髪だけ残し、上辺りで適当に紐で結んでいる。いわゆるポニーテールというやつだ。

「あれ？ なんでイクセがここにいるの？」

「言ってなかったか？ 俺もここに泊まったんだよ」

ルカが止まったこの宿屋は大きいし、同じ宿になる可能性もなくはない。

だが聞いてないよ、と驚くルカを尻目にイクセはただ面白そうに笑っていた。

ルカは結局、イクセの隣に座って朝食を取ることになった。今日

のモーニングセットは小麦色に焼き上がったトースト、コーヒー（イクセはブラック、ルカは砂糖とミルク入り）にレタスとトマトのサラダ。

たっぷりとイチゴジャムを塗ったトーストをかじりながらルカは聞いた。

「ねえ、本当に一緒に来るつもりなの？」

朝食が運ばれて来る間にイクセから聞かされた驚きの提案。アルは相変わらずしれつとしていたが、ルカは約一分無言で目を白黒させていた。イクセはルカについて来るという。

そもそも二つ名で呼ばれる彼が、自分の旅に同行するメリットがないではないか。

「駄目か？」

「そうじゃないけど、アーヴィンさんからイクセはあんまり人と組まないって聞いたから」

駄目か、と聞かれれば駄目なはずがない。イクセは街を出でから初めて気負わずに話せる相手だし、何より一緒に居て楽しい。

しかしイクセほどの冒険者となれば引く手数多のはず。それなのに自分と共に来ていいのだろうか。

「まあ、俺は気に入った奴としか組まないからな。お前が気に入った。それじゃ不満か？」

そう言って黒呀と謳われる青年は、憎らしいくらいに惚れ惚れする笑みを見せる。

そこまで言われれば、嫌とは言えないではないか。ルカは困った

ような、苦笑めいたような表情を作った。

そんな二人を尻目に、アルは我関せずといった様子でイチゴジャムを食べている。ル力以外にはとことん関心がない竜である。

「ううん。じゃあ改めてよろしく、イクセ」

ル力はイクセに向かって右手を差し出す。イクセもル力の手を取り、しっかりと握り締めた。

そしてその二人の手の上に銀色の竜がぼすつ、と乗り上げる。

どうやら自分を忘れるなどの無言の抗議らしい。さっきは全く干渉しなかったせに現金な者であるとはイクセの談。

イクセは仕方なくもう一方の手、左手でアルの頭を撫でてやった。彼が不服そうにイクセの手を押しつけたのは、それから五秒後のことである。

忙しい少年

昨日は色々と手一杯で街中を見て回ることも出来なかったが、アルストロメリアはエランディアとは全く違う。

エランディアにも朝市はあるが、露店に並ぶものは随分違う。新鮮な魚介類や野菜が並んでおり、威勢の良い声が飛び交っている。目にする物全てが珍しく見えてルカは思わず顔を綻ばせた。

故郷の街は海に囲まれていることもあり、ジャムなどの保存がきく物を除いて新鮮な果物や野菜は貴重だった。

エランディアでも野菜は栽培されていたが、潮風に耐えられるものとなれば限られてくる。果物も同じだ。

「そんなに珍しいのか？」

嬉しそうに顔を輝かせるルカを見て、イクセは露店にある林檎を買って手渡した。

ルカが思いきってかじると、みずみずしい林檎の爽やかな味が口内に広がる。

嬉しそうに林檎を頬張るルカだが、一体どんな辺境に住んでいたのか。アルストロメリアは街の中でも一般的で、他と比べて変わった所もない。

イクセの故郷も島国であるが、生鮮食品は豊富だったため、大陸に来て驚くことはなかった。

「うん。イクセには言っていなかったよね？ 俺はエランディアの出身なんだ。だから街を出るのも初めてだよ」

「へえ、あの変わった風習の」

エランディアには不思議な風習があるとイクセも聞いたことがある。

確か成人を迎えるまでは街を出ることを許されない、そんな感じだっただろうか。言われてみれば依頼の最中でも街道をきよるきよると見回していた。

しかしそれにしては戦い慣れていると思うのだが。

イクセは彼にしては珍しく怪訝な表情をしている。こう見えて聡いルカは、彼の疑問に気付いたようでああ、と声を上げた。

「エランディアで何でも屋紛いの仕事してたから。基礎は父さんから教わったんだけど、結構魔物も出るしね」

一口に魔物といっても様々で、ひっそりと住んでいるものもあれば、人に牙を剥く魔物もいる。

何でも屋の仕事には、そう言った人に害なす魔物の退治も入っていたのだ。

ルカの父、ゲイルは運び屋をしていることもあって剣術の心得があった。ルカは知らないことだが、会話に困った彼は徹底的に息子に剣術を教え込んだのである。

「なるほど。道理で街を出たばかりでも戦い慣れてるわけだ。で、どこか行きたい所あるか？ ギルドに行くにも急ぐことでもないだろうし」

「んー、じゃあ武器屋に寄っていい？」

イクセが何故だと尋ねると、ルカは二の腕に付けているスローナイフの鞘を指差した。

アーヴィンを助ける時に投擲して回収するのをすっかり忘れてい

ただ。

武器屋に一步踏み入れたルカは思わず感嘆の声を上げた。故郷の街とは比べ物にならない品揃えだったからである。

剣だけでも多くの種類があり、兵士が好んで使う、炎のように波打つ刀身を持つフランベルジェや冒険者の間ではお馴染みのバスタードソードなどの有名所。

使い手の少ない、曲線を描く細身の刀剣シャムシールや、その重量からあまり実用とは言いづらいツーハンドッドソードまで様々である。

それらを横目にルカは短剣やレイピアなどが陳列されている一角に向かった。

本来短剣は投擲に向いているとは言えない。投げるよりも直接斬り付けた方が良いからだ。

射程自体も長いとはいえないし、急所に当たらなければ決定的な傷にもならない。ルカがあえてスローナイフを使うのは馴染みの武器だったからといえる。

「んー、どれにしようかな」

「これなんかどうだ？」

イクセが手に取ったのは、黒い柄に少し長めの刀身。シンプルな作りのナイフ。ルカはそれを受けとって軽く振る。持ちやすさは勿論、値段も手頃だ。銀の刃には一点の曇もない。

ものの数秒で購入を決めたルカは店長の元へと向かう。イクセは会計を待つ間、アルを頭に乗せて陳列された武器たちを眺めていた。

「重いんだが……」

『知らんな』

イクセの抗議も当然、アルには黙殺される。将来禿げたらどうしてくれるんだと言いたい、言えるはずもなく。

こうして見て回っても、流石に刀は置いていないようだ。

刀は所謂“斬る”ことに特化した剣である。刀身は合金で作られていることもあり、最も強靱な刃をもっていると言えるだろう。

そうこうしている内に会計を終えたル力が戻って来た。何やら晴々しい顔をしているが……。

イクセの頭に乗っていたアルが、定位置であるル力の肩に乗る。

「じゃーん。値引きしてもらったよ」

得意そうに語るル力に思わず店長の方を見ると、疲れたような、だがこちらもどこか晴々しい表情を浮かべていた。

どれだけ値引きして貰ったのか分からないが、ル力が満足したことは確かだ。

「一体何したんだ？」

「えっへへ、秘密」

イクセが尋ねてもル力は秘密と笑うばかり。余程嬉しかったのだろう。見て見て、と肩に乗るアルに見せている。

笑うル力は十五歳の少年そのもので、とても竜を倒すほどの魔奏士には見えなかった。

絆を繋ぐもの

武器屋を後にしたルカ達は、その足でギルドへと向かう。

冒険者としての正式な手続きを行うためだ。

ギルドは昨日訪れた時とは違い、静けさに包まれていた。しかしギルドの“静か”の定義は普通の“騒がしい”であるため、あてにはならないが。

ここのギルドは酒場でもあるため、まだ朝だと言うのに多くの人で賑わっている。朝っぱらから酒をあおる者、テーブルに突っ伏して眠る者、ポーカールに興じる者など様々だ。

ルカがそんな彼らを見回しながら歩いていると、その度に誰かに話し掛けられる。

カウンターに向かうまで一体何人に声を掛けられたか。

「ねえ、イクセ。なんでこんなに話し掛けられるんだろ？」

当の本人は小首を傾げてイクセに問うた。本当に話しかけられる理由が分からないのだろう。

やはりこの少年は鋭いのか鈍いのか分からない。昨日あれだけ目立っていたのを忘れたのだろうか。それともルカの基準では目立つ、に入らないのかもしれない。

肩に乗ったアルはそんな彼に慣れているようで、頭を押さえようとしたイクセを見て、微かに笑っている。

「あのなあ。昨日あれだけ目立ってたただろうが」

「目立ってた？」

「昨日魔歌を歌ってただろう。後、俺が付いて行ったせいもあるけど」

目立ってた、と言われてルカは本当に不思議そうな顔をしていた。確かに喧嘩を止めたが、それだけで話しかけられるとは思えないからだ。

問題なのは喧嘩を止めたことではない。何、で喧嘩を止めたのか、だ。

しかしルカが声を掛けられた理由はイクセにもあった。人を近付けぬことで有名なイクセが成人を迎えて間もない少年を気に入って同行したというのだから、冒険者たちが興味を示すのも仕方がない。

「あ、あれ？俺にとって魔歌を歌うことは別に特別なことでもないから、全然気付かなかったよ。ってかイクセのせいじゃん！」

普通、魔奏士は滅多に魔歌を歌わない。少なくとも喧嘩の仲裁には使わないだろう。それは彼等が力を見せつけることを嫌うからだ。魔歌は学べばある程度、誰でも扱う事は出来るが、歌が重要な意味を占めるため、個人の落差が激しい。

特にルカが歌った『絶対氷結』など高度な魔歌となれば、歌える者も限られてくる。それはつまり、魔奏士であっても雲泥の差がある場合もあり、自らの手の内を見せないという意味でもあるからだ。

『ルカはエランディアでもよく歌っていたからな』

アルが言うように、ルカは故郷ではよく歌っていた。仲の良い子供たちにせがまれるからだ。勿論、歌うことが好きなのも理由の一つだが。

それにルカにとって魔歌は自分とアルを繋いでくれたきっかけであり、人と人を結ぶもの“絆”であって隠すべき特別なことでは

ない。

「おはよう二人共。アル君もね」

「元気そうで良かった。昨日沈んだ顔をしてただろう？」

二人とアルを出迎えたのは、昨日と同じようにカウンターに立つリリースとアーヴィンだ。

彼の腕には包帯が巻かれているが、昨日よりか楽なのか動作は自然そのものである。アーヴィンはグラスを磨く手を止めて柔らかく微笑みかけた。

もしかして自分はそんなに顔に出ていたのか。どうやらリリースも気付いていたようで、ルカは急に恥ずかしくなって俯く。

「あ、はい！ すみません。ちょっと色々あったんで。でももう大丈夫です！」

心配してくれた二人に申し訳なくて、ルカは何とか笑みを作った。けれど“彼”を助けられなかったことを思うと辛い。

でもそれと同時に、ちつぽけな力で誰かを救えるなど思い上がりだと思う自分もいる。あれで本当によかったのだろうか。何か別の方法があったのではないのか、と何度も考えてしまう。

考えた所で“答え”が出ないのは分かりきっている。

しかしそれを止めることはルカには出来なかった。

ただ皆に心配をかけたくない。その一心でルカは何でもないと笑う。少年の気遣いに気付いたイクセはルカの頭に手を置いた。無理をするなどの意味を込めて。

「そう？ ならいいんだけど……」

「そうそう、ルカ君も晴れて冒険者になった訳だし、肝心な物を忘れてたわ。今から渡す物は、ライセンス代わりだと思ってちょうだい。冒険者のランクは石の色を見れば直ぐ分かるわ。ルカ君はまだ取ったばかりだから緑よ。後は順に赤、青、紫ね」

リリスもアーヴィンもルカより人生経験豊富な“大人”である。二人はルカの様子から何かを察したようで、深く追及することは止めたようだ。

気を取りなおしたリリスが差し出したもの。不思議な輝きを放つフォレストグリーンの宝石が嵌め込まれた耳飾りだった。シンプルだがそれ故に無駄な細工がなく、ルカが好きなデザインである。

この石は冒険者の身分を証明する物であり、石の色で持ち主のランクが分かる仕組みになっているらしい。

「ちなみにイクセって勿論……」

リリスが持つ耳飾りを見てふと思う。そういえばイクセのランクを示す石は何色だろう。隣のイクセに視線を向けると、彼は笑いながら無言で刀を見せる。

その剣帯には飾りが付けられていた。石の色は言うまでもなく『紫』。冒険者の最高位である。^{ハンター}

「……ですよねえ」

アルの悩み

「ルカちゃんにはこれが一番似合うと思ったの。これは絶対に無くさないようにしてね。一応ギルドからの支給品だけど紛失した場合、自費だから」

冒険者となって初めて支給される石はライセンス代わりとなるため、装飾具など直ぐ見せられる物を選ぶ冒険者ハンターも多い。

イクセも剣帯に付けているし、首飾りや腕輪といった装飾品に加工する者たちもいた。

リリスによると紛失した場合、自費らしい。聞けば飛び上がるほど高いという。これは嵌められている石が特殊なせいでもあるが、正当な理由があれば紛失、または破損しても支給される。

「分かりました。気をつけます」

リリスから耳飾りを受けとって付けると、ルカは改めて自分が冒険者になったのだと実感した。一人前には程遠いだろうが、それでも今はこれでいいと思う。

例え一歩ずつだとしても自分は確かに進んでいるのだ。そう考えると嬉しさが込み上げてくる。シャーレンのことを考えると胸は痛んだが、今は納得して前に進むしかないのだろう。

「そつえば、ルカ君はこれからどうするんだ？ イクセはどうせ君に付いて行くんだろう」

アーヴィン曰くイクセは元から一つの街に長居するタイプではないし、ルカを気に入っているらしい。彼とは結構な付き合いであるアーヴィンにはイクセがどうするのか、何となく理解出来ていたの

だ。

「世界を見て回ろうと思います。俺、今まで故郷の街——エランディアから出たことがなかったのよ」

「だからあの時も道が分からなかったわけか。君がエランディア出身なら納得したよ」

成人を迎えないと街を出られないというしきたりは、大陸中探してもエランディアくらいなものだ。こうして街の外に出て分かったが、外の世界は本当に広い。

見るもの全てが新鮮で、自分の知らないことだらけだ。

知らないものに触れるのは胸が躍る。無論、目に見える全てが綺麗だとは限らない。むしろ汚れている部分の方が多いかもしれない。世界が決して綺麗なだけではないことはルカも分かっていた。

まだまだ一人前とは言えないだろうが、何も知らない子供ではないのだ。

この先、楽しいことばかりではなく、辛いこともあるだろう。シヤーレンの時のように、誰かの命を絶たなければならない場面に出くわさないとも限らない。

それでもルカは知りたいと思う。まだ見ぬ世界を、これから出会うであろう多くの人々を。

「ね、二人とも。目的地はどこにする？」

「まあ、俺はお前に付いてくから気にするな」

ルカの声に答えたのはイクセ。いつもなら真っ先に反応するはずのアルは、考え込むように虚空を見つめている。

普通の人間には竜の表情など分からないだろう。だがルカには分かった。

今のアルは悩んでいる。間違いなく。

アルが悩みや迷いといった感情を表に出すことは滅多にない。というか見たことがなかった。ルカの前でも、だ。

そんなアルが言うことを躊躇っている。何年も一緒にいるのに直ぐに気付けなかったことが悔やしかった。アルにとって自分^{ルカ}は何なのだろう。親友であり、時には父や兄であった彼。

「おし、ちよつと場所変えるか」

氣を利かせて言ったのはイクセである。彼はルカの頭を軽く叩いた後、安心させるように髪を撫でる。確かにここは騒がしいし、場所を変えた方がいい。

ルカはアーヴィンとリリスに再会の約束をして、イクセと共にギルドを出た。

共に存るとの誓い

ギルドを出た二人と一匹が訪れたのは、街の中心に位置する広場。水が豊かなアルストロメリアを象徴する大きな噴水が目を引く。

まだ朝も早い、運動をする者や朝の散歩をする者など結構な人を見かけることが出来た。アルストロメリアはかなり大きな街であるが、広場の周辺には木々が植えられ、鮮やかな花々が咲き誇っている。

ルカとイクセは空いていたベンチに腰掛け、アルは話をし易いように手摺に飛び移った。

「……ねえ、アル。何か言いたいこと、あるんじゃないの？」

噴水を見据えたままルカは問う。目の前では子供たちが噴水の水を掛け合ってはしゃぎ回っている。朝から元気な限りだが、彼らは朝も昼も関係ないのだろう。

対するアルは無言。まだ話していいものが悩んでいるのかもしれない。以前ならアルが話したくないのなら、ルカも無理に聞こうとは思わなかった。

けれど、シャーレンの一件があつてからアルの様子は明らかにおかしかった。暫しの沈黙の後、アルは重い口を開く。

「……正直な話、私も何と説明したものか困っているのだ。話せばお前を巻き込んでしまうかもしれない。そうなればお前まで危険に曝すかもしれないのだ。ルカよ、それでも尚、知る覚悟はあるか？」

アルを見れば美しい金の瞳と目が合った。知る覚悟はあるか、彼の顔と声は真剣そのもの。アルがここまで言うのなら、本当に危険に曝されるのだろう。

だがそれが何だというのか。例えば危険が身に迫ろうが構わなかった。ルカにとつてはそれよりも、アルがいなくなってしまう方がずっと怖い。ルカは案じて欲しい訳ではなく、彼が背負うものを少しでも背負わせて欲しいのだ。

イクセは口を挟むことなく、二人の会話を聞いている。ルカはアルの瞳を見据え、無言で肯定の意を示すように頷いた。

『お前たちの言葉で言うのなら同族だろうが、私と同じ存在^{もの}が今、命の危機に瀕している。このまま何もしなければ、確実に命尽きることだろう。しかもその者が受けた傷は喪歌や古代歌では癒すことが出来ない。何故ならそれは、竜を滅ぼすために編み出された魔歌^{スヘルアリア}だからだ。今はことは別の空間にいるが……。本来ならお前に頼むべきなのだろう。しかし、お前を巻き込むと分かっている、私は言えなかった』

人には効かず、純粋なマナで構成された竜のみを傷付ける。受ければまず無事では済まない。例え生き残ったとしても、その傷は喪歌や喪歌よりも上位とされる古代歌の癒しすら受け付けぬ。それは正に竜族を滅ぼすためにだけに生み出された狂気の魔歌。

アルと“同族”だからこそ、“彼”はかろうじて命を繋ぎ止めている。今は純粋なマナが溢れる空間にいるようだが、それでも尚助かるかどうか……。

『アル』が助けられない以上、ルカに助けを求めるべきなのだろう。本来なら迷うことすら許されない。けれど、もし彼と引き合わせれば、ルカを自分たちの事情に巻き込んでしまいかもしれなかった。それだけならまだいい。彼を傷つけた相手がルカを傷つけないという保証はどこにもないのだ。

だからアルは迷っていた。話せばルカは絶対に行くと言いはるだろう。危険に曝されると分かっている、誰かを見殺しにするよう

な少年ではないからだ。

「アルはその人、って言うのもおかしいけど、会いに行きたいんだよね？」 ロストアリア なら俺も行くよ。喪歌や竜の古代歌じゃ助けられないのなら、スベルアリア 魔歌で助けられるかもしれない。それに……アルはずっと俺と一緒にいてくれるんでしょ？」

ル力はふわりと笑ってアルの頬に手を添える。『アルトゥール』は人間の少年と共に生き、共に存ることを誓ってくれた。約束してくれたことが、ただ純粹に嬉しかったのだ。母が死んでから、父は滅多に帰ってこなくなった。寂しくて悲しくて、震えるル力にアルは言ってくれた。この命ある限り、共に在る、と。

『ああ。此の命有る限り、私はお前と共に在る』

アルは誓いの言葉を口にすると目を細め、添えられた手に頬を寄せる。

幼きあの日、アルが誓ってくれた言葉。何よりも嬉しかった。自分は一人居ないと勇気付けられた。

でも改めて言われると何だか照れ臭い。ル力はアルから手を離すと話をそらした。

「……うん。ありがとう。あ、イクセはどうするの？」

不安気に隣のイクセを見上げる。ル力にしてみればついて来てくれれば心強い。だがアルは命の危険に曝されるかもしれないと言った。いくら彼が凄腕の冒険者と言えど、人より遥かに強い力を持つ竜までもが危険だという場所に好んで行くだろうか？

もし行くというのなら余程の物好きである。それに冒険者は体が資本だ。これは依頼ではないし、ましてや報酬があるわけでもない。

いくら彼がル力を気に入っているといっても、それとこれとは話が別だ。

「ん？ 俺はお前について行くって決めたからな。今更何がこようとも構わないさ」

だがル力の懸念をよそに、イクセは軽く答える。イクセにとって死の危険は日常茶飯事、隣り合わせに存在する。冒険者である以上、死の危険は避けては通れないのだ。

死にかけた経験など一度や二度ではない。死を覚悟したことだつてある。

「イクセ……」

『お前は本当に変な奴だな。ある意味では感心する』

ル力はイクセの名を呼ぶことしか出来ない。会ったばかりの自分と共に来てくれる。それがどんなに嬉しいことか。

ル力の肩に乗ったアルは呆れたように笑う。酔狂な人間だ。ある意味では驚嘆に値する、と。

「そりやどうも。で、そこへはどうやって行くんだ？ 聞くにはことは違う空間なんだろ？」

『それは問題ない。私とあやつは繋がっている。何せ同じ存在^{もの}だから。しかし……そうだな、人目につかない場所がいいだろう』

「じゃ、街の外だな」

人目につかない場所、となれば街の外に出るのが一番早い。街中

でも人気がない場所はあるにはあるが、ここからなら外に出たほうが早い。

イクセに連れられ、ルカとアルは広場を出て街の外へと向かった。

共に存るとの誓い（後書き）

まだまだ序盤です。先は本当に長いですね……！

光満ちる水晶の洞窟

アルストロメリアを出た二人と一匹は、街道から少し離れた場所にいた。朝も早いとは言っても人の姿も疎らで、わざわざ横道に入らなくてもよかったかもしれない。

太陽の光に目を細めながら、ルカとイクセはアルを見る。次に何をすべきか、それを知るのは彼だけだから。

「次はどうしたらいいの？」

『私の言う通りに地面に紋様を書いてくれ』

ルカは頷いて落ちていた木の枝を拾い、アルの指示に従って手を動かした。そうして出来上がったのは複雑に描かれた紋様——魔法陣。それは夜空に瞬く星のようであり、天に輝く月でもあり、万物を照らす太陽のようでもあった。かなり抽象的であるが、他に例え方がないからだ。

『ルカ、イクセル。魔法陣の中に』

二人はアルの指示通りに魔法陣の中に入る。ちょうど二人が立てるくらいのスペースで少々狭いが、この際文句はいつてられない。アルはルカの肩の上から飛び降りると二人の前に立った。

『……紋様を力、巡るが如く満ちる力よ。我が望みし場所、汝が作りし狭間の世界と共に在る事を我は願う。白銀の名に於いて命ずる。我が証たる鍵を以って強固に閉じし扉、今開かん』

アルが紡いだ歌。それは喪歌ではない。竜は簡単な喪歌なら呪文

すら必要なく、咆哮一つで発動出来る。その竜が長い詠唱^{うた}を必要としているのなら、今アルが歌っているものは何なのだろう。

どちらかというと、今はもう失われて久しい古代歌^{エンシェントアリア}に近く、完成した歌には喪歌や魔歌を歌う場合に必ずある結びの部分がなかった。では果たしてこれは喪歌といえるのだろうか。瞬間、魔法陣から放たれたまばゆい光がルカの視界を灼いた。

次に目を開けた時、ルカの瞳に映ったのは、先程までいた街道ではなく、視界一杯に広がる魔水晶の洞窟だった。壁や地面にも無数の魔水晶が生えており、濃密に凝縮されたマナを感じる。

紫の光を帯びた青の魔水晶は何処からか差し込む光によって、きらきらと幻想的に輝いていた。

しかしルカは美しい景色を楽しむことが出来ず、思わずしゃがみ込んだ。胸がむかむかして気持ち悪い。吐き気はないが、息苦しいと言えはいいだろうか。

『大丈夫か？ 濃密なマナは我等にとって力となるが、人の身には辛いやもしれぬ。特にルカはマナに敏感だからな。イクセル、お前はどうか？』

イクセが心配して背中をさすってくれるが、息苦しさや何ともいえない気持ちの悪さは治まりそうにない。イクセはまだ平気そうに見えるが、心なしか顔色が悪いように見える。平気なのはアルだけで、彼はルカを気遣ってイクセの肩に飛び移った。

「頭痛が少しだけ、な。我慢出来ないほどじゃないから問題ないが、ルカは大丈夫……じゃねえよな。全然」

気分が悪くなったのは、ルカがマナに敏感な体質だからだろう。それは魔奏士としては重宝されるものであるが、今この場では辛い

だけだ。心配したアルが戻るかと思ねるが、ル力は首を縦に振らなかった。イクセの手を借りて何とか立ち上がる。

通常ならマナが人体に影響を及ぼすことはない。

だがこの洞窟に満ちるマナの濃度は通常を遥かに超えていた。薬も使い過ぎれば毒となるように、マナもこれほどの濃度まで来れば人の体に悪影響を及ぼしかねない。

「俺なら大丈夫だから急ごう。怪我してる竜が心配だよ」

アルもイクセも何も言わなかった。言っただとしてもル力は聞き入れない。ならば自分たちが出来るのは、ル力の負担を減らしてやることだけ。そうと決まれば早く竜の元に向かわなければならぬだろう。アルはイクセと視線を交わし合い、先に進むのだった。

光輝く水晶の洞窟もずっと見続けていれば当然、感動は薄れてしまふ。同じ景色が続くのだから辛い所だ。少なくともイクセは五分で飽きた。

どうやら奥へ行けば行くほどマナが濃くなっていくようで、それに従って、頭痛が起こる回数も増している。

辺りを見回せば、魔水晶の周りを幻想的な光が舞っていた。ル力には分かる。これは『マナ』だ。本来なら黙視出来ないマナが視認出来るほど、この洞窟にはマナが溢れている。

刹那、地面に生える水晶の影から何かが姿を現した。

「……誰？」

ル力たちの前に現れたもの。それは狼なのだろうか。熊ほどの体躯にふわふわとした銀色の体毛を持っている。すらりと伸びたしなやかな肢体。背に輝くのは光を封じ込めた水晶のような翼。洞窟に

生える魔水晶と同じ、紫掛かった青い水晶の翼は、硬質的な輝きを秘めていた。

牙を剥き、襲い掛かるようすもない。青み掛かった紫の双眸には深い知性の輝きがある。

『我は蒼穹の君の眷属たる者。人の子らよ、ここはそなたらが立ち入るべき世界ではない。一体何用で参った？』

狼から発せられた声は低いが女性のように。

ただしこの狼は人の言葉を話しているわけではない。竜と同じように声を聞く者だけが聞くことの出来る声だ。
ドラグナー

「俺たちはアルの知り合いに会いに来たんだ。それが貴方の言う蒼穹の君かどうかは分からないけど」

『蒼穹の眷属よ、名は何と申す』

『申し遅れました、白銀の君よ。我が名はイシュリア。蒼き眷属。ではその方々は……』

イクセの肩に乗ったアルに気付いた彼女——イシュリアはアルに向けて深く頭を垂れた。二人と言っているのか分からないが、二人の間で交わされる会話を理解出来ないルカとイクセは、ただ見ていることしか出来ない。

白銀の君、そして蒼き眷属。彼らにしか分からない会話。

『青髪がルカ、黒髪がイクセ。二人とも私が認めし者、ルカは我が真名を与えた人間だ』

イシュリアの青紫の瞳が驚きに見開かれた。眷属であるイシュリ

アはその意味を何よりも理解している。この少年は白銀の君が真名を与えるほどの人間なのか。

イシュリアの主が聞けばきっと驚くだろう。昔の彼と同じように人間を嫌う主なら。

『……承知致しました。我が主の元に案内いたします。どうぞこちらです』

イシュリアは再び頭を垂れると、わざわざルカたちに歩幅を合わせて歩き始める。辺りには二人とイシュリアの足音だけが反響していた。

イクセの肩に乗ったアルが俯くルカを案じて声を掛ける。

『ルカ、本当に大丈夫か？』

最奥に近づくにつれて、感じるマナは密度を増していく。ルカは我慢しているようだが、明らかに顔色が悪い。アルは少しだけ、彼を連れて来たことを後悔した。

アルにとってルカは何物にも変えがたい存在だ。何を賭してでも守りたいもの。

しかし彼の意見を尊重することもまたアルの望みなのである。

「大丈夫。まだいけるよ」

気丈に答えながら、ルカは休むことなく歩き続ける。シャーレンのように目の前で何も出来ないのは嫌だ。例え彼が望んだこととしても自分はシャーレンを殺した。その事実是不変である。

ルカだって自分の限界は分かっている。出来ることと出来ないことも理解している。

だが頭では理解していても実際、納得出来るかとなるとまた違う

のだ。だから助けたい。ちつぱけな力だっていい。自分に出来る最大限のことをしたいから。

『分かった。お前を信じよう』

ルカが考え、悩んだ末に決めたことなら従う。『アル』はそう誓ったではないか。

ルカを信じることに。彼を信じなくて自分は、一体何を信じるというのだろうか。

「ありがとう」

そう言っただけルカは笑った。眩しくて、でも優しくアルの一番好きな顔だ。ルカの笑顔を見る度、自分の選択は間違っていなかったのだと確信出来る。

世界は決して優しく、美しいだけのものではない。運命は時に残酷で、一欠片の救いもない。

だがそれでも自分たちは生きていかなばならないのだ。この“世界”で。

『何がだ？』

「俺を信じてくれて」

首を傾げるアルにルカは笑っている。礼など必要ないと何度も言っているのに。体調が悪い時もそうやって他人を気遣うルカをアルは本当に誇らしいと思った。

彼のような人間に出会えたことがアルにとっての奇跡。

『当たり前のことだ。わざわざ礼を言われるようなことではない』

蒼穹の鱗持つ竜

それは見上げるほどに強大な竜だった。大きさだけで言えばアルの本来の姿と同じくらいだろう。鮮やかな蒼穹色の鱗は光を反射して煌めいていたが、傷口から流れる真つ赤な血が痛々しい。

傷は体全体及んでおり、穿たれた傷とも擦過傷とも違う、まるで内側から裂けたような傷だった。本来なら美しいはずの藤色の瞳は半ば光を失い、口からはひゅう、ひゅうと苦しげな吐息が漏れている。

ルカとイクセはその姿に言葉を失った。思わず目を背けたくなくなるような傷だ。

『ふっ……我を笑いに來たのか、白銀よ』

蒼穹色の竜はイクセの肩に乗ったアルを見据えて、低い声で笑う。苦しげに絞り出したような声は年若い男のもの。イシュリアが心配そうに蒼穹色の竜に寄り添った。

アルはイクセの肩から降りると蒼穹色の竜を見上げる。巨大な彼に比べ、今のアルはとても小さい。子供と大人のようだ。

だがアルが纏う雰囲気は竜とは比べ物にならない。存在感がまるで違う。

彼等の間に流れる空気は勿論家族ではないし、友人とも少し違った。では何なのだろう。

『何を馬鹿なことを。全く、歳を取ると捻くれてくるのか？ ヒヨツ子が。……その傷は誰にやられた？』

『分からない、としか言えぬ。だが滅竜歌を歌えるのは『人』だと貴公も分かっているだろう？』

そう、滅竜歌は人間にしか歌えない。

だがそれは千年前に失われた魔歌のはずだ。しかし彼の傷口を見れば直ぐに分かる。内側から裂けたような傷は間違いなく滅竜歌によるもの。

アルと同族であるからこそ、今は命を繋いでいるが、それもいつまでもつか分らない。いかに強靱な生命力と再生力を持つ竜と言えど、滅竜歌によって付けられた傷を治す術はない。竜族が操る喪歌では、治すどころか傷を悪化させてしまうだろう。

『そうだな。……ルカ』

ぴくりと竜の体が動いた。ルカ。この人の子があれを看取ってくれた者なのか。本来なら竜と眷属であるあれば、意識的に繋がっている。

しかし何かが原因で最後の声は殆ど聞き取れなかった。最後の時、彼の中に流れて来たのはあの子の想い。そしてルカという名の人間の名前だけだった。

『……ルカ。そうか、人の子よ、そなたは我が眷属、シャーレンの最後を看取ってくれた者なのだな。礼を言う。あの子は楽に逝けたのだな』

「違うっ！ 違います！ 俺は俺は……殺すことでしか彼を助けられなかった。だから礼を言われるような事ではないんです」

気が付けばルカは思わず叫んでいた。それまで抑えていた想いが堰を切って溢れ出す。

あの時、何か出来ることはあったのではないか。仮定の話だと分

かっている。

けれどその想いはルカの中で日増しに強くなっていった。シャーレンの最後の表情が瞼の裏に焼き付いて離れない。

『違うのだ。人の子よ、シャーレンの最後の想い、我は確かに受け取った。あやつはそなたに感謝していたよ。己を責めるでない。シヤーレンもそれを望まぬだろう』

竜の口から出た予想もしない言葉にアルとイシュリアは驚いていた。彼が人間嫌いであることはアルやイシュリアが一番良く知っていたからだ。

シャーレンの最後の想いが、彼の人間に対する見方を変えたのかもしれない。

ルカが口を開こうとした直後、竜が激しく咳込んだ。苦痛を耐えるようにうずくまるが、閉じた口から鮮血が溢れ、水晶の床を赤く染める。

『蒼穹！』

『主様っ！』

『……心配、ない。少し痛んだ……ただだ』

アルとイシュリアから悲痛な声上がる。蒼穹色の竜は、二人の声を聞いて緩やかに身を起こした。少し傷んだだけ。それが嘘だということとは明白だった。ルカは血塗れになるのを省みず、竜に近寄る。やはり塞がりかけていた傷が開いていた。

『何を……？』

竜はルカの意図が分からず問う。

だがルカはそれに答えず、傷口に手を当て、精神を集中させた。
マナが溢れるこの洞窟ならば、例え二重唱用の魔歌デュエットであっても一人で発動出来る。

しかし本来二人で歌う魔歌を歌えば、上手くコントロール出来ず暴走するかもしれない。

いや、マナが莫大にあるここでは、一つ間違えば確実にそうなるだろう。それでも迷っている暇はなかった。そのためにここに来たのだから。

『輝ける光輪。其の色彩いろは御使いの証。人々の願いと祈りを知る者。其は傷付きし翼癒す清麗の乙女。今此処に降臨し、我が懺悔ねがい聞き届け賜え。赦しの言葉あかしを示さんが為に……』

気を抜けば、意識を持っていかれそうだった。本来なら二人で制御するものをルカ一人でしようとするのだから、当然だ。

しかしそれは彼が考えた以上に難しいものだった。魔歌は発動さえしてしまえば安定する。だが逆にいえば歌っている時は非常に不安定であると言っている。

今ここで魔歌が暴走すればルカは無事では済まない。意識を保つことに集中する。昔、魔歌を教わった時、アルに言われたことを頭の中で反芻する。

『良いかルカ。魔歌で一番大事なことは“歌う”ことだ。歌にならないものは魔歌にあらず、また魔力を紡ぎ、マナを操る歌。それが魔歌や喪歌だ』

“歌うこと”。それは高位の魔歌であろうと二重唱であろうと変

わらない。全ての魔歌に通じることだ。落ち着いて、マナを感じればいい。

ルカは魔奏士として天賦の才を持っている。師がアルだったことも理由の一つだが、それを差し引いても彼は優秀だ。

一つを教えれば、二つを学び、教えた術を自分がやり易いように何度も変化させて行く。当初はアルも驚いた。まさかルカにこれほどの才があることに。

だから見てみたくなったのだ。彼なら人の高みに到達出来るのではないかと。

『……遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。想う心を知るならば、今導きの声に応えよ——煌天子』

蛍火に似た光が生まれる。最初は一つだったものが二つ三つと増え、やがて大きな光となった。

現れたのは淡い光に包まれた銀色の髪の手透明の少女。

まるで罪ある者全てを赦すように優しい笑みを浮かべている。背には御使いであることを示す白翼と、頭上で輝く光輪があった。

純白の長衣を身に纏う彼女は目を閉じると、透き通る白い腕で竜を優しく包み込んだ。

刹那、少女と竜の体全体が輝くと、ふっと少女の姿が解けて消える。するとどうだろう。出血は止まり、全ての傷は跡形もなく塞がっていた。

蒼穹の鱗持つ竜（後書き）

か、肩がこります……！

ウイスタリア「セレス」ノーザンライツ

「ルカ！！」

「だい……じょうぶ」

意識を失いかけた所をイクセに支えられる。名前を呼ばれていなければ、ルカはそのまま倒れていたかもしれない。少しふらついただけだと言つて、イクセの手を借りて立ち上がる。

だがルカが立っているだけでやつとの状態だと、誰が見ても明らかだった。普通の魔歌であればこれほど消耗することはなかっただろう。

しかしルカが歌ったのは二重唱用の魔歌。竜であるアルには手伝つて貰えないし、イクセとは一緒に歌えない。二重唱は歌い手たちの息が合わなければ成功しないのだから。会ったばかりのイクセと歌えるはずがなかった。

辛い時も悲しい時もルカは滅多に他人に弱い所を見せようとはしない。それは幼くして母を亡くし、家を空けることが多くなった父に、ルカが身につけたものだといえる。

街のみんなに、何よりも自分を案じてくれるアルに心配を掛けたくなかったからだろう。

『ルカ、無理をするな。辛い時は辛いと言え。でなければ私は何のために居るのだ？』

アルはルカに気を遣つて貰いたいのではなく、話して欲しいのだ。ルカはアルの“支え”になつてくれた。では自分はルカの何になれ

るのだ。親、ではないだろう。親友ではあるが、ただの親友とも違う。明確な答えが出ないことを理解しつつも自問し続けていた。

そしてルカはアルにそんな表情をして欲しい訳ではない。ただ成人を迎えたからには、アルにばかり甘えていられないと思ったから。だけどそれは結局、ちっぽけな意地だったのかもしれない。

「うん。ありがとうアル」

『貴公も随分丸くなったものだ。人の子よ、名は何と言う？』

蒼穹色の竜はすっかり生気が戻った藤色の目を細め、アルを見て楽しげに笑う。痛々しい傷はどこにも見当たらず、蒼穹色の鱗は空を切り取ったかのよう。

何故急に名前を問うのか疑問に思ったが、ルカは素直に答えた。

「ルカです。ルカ・エアハート」

『手を前に出せ』

言われた通りに両手を差し出す。その意味を理解したアルとイシユリアは僅かに目を見張った。イシユリアの方は驚いていたと言っても過言ではないだろう。

『我が名はウイスタリア。ウイスタリアセレスノーザンライツ。蒼穹の名を冠す者。心優しき人の子、ルカ・エアハートよ。汝を我と対等である存在と認め、我が一部を授ける』

「これは……竜笛」

差し出した手に淡い光が灯ったかと思うと次の瞬間には、不思議な青い光沢を放つ何かが現れていた。形状だけで言えばオカリナにも見えるが、それにしては小さい。

竜笛と呼ばれるそれは、竜族が友好の証として人に贈る物だ。竜の一部である鱗から作られ、強力な魔力を秘めるそれは魔法的な護符も兼ねるという。

『ルカよ、私のことはウイスタリアと呼ぶが良い。もっとも白銀からも真名を授かっただろうが』

竜はウイスタリア、と名乗った。“蒼穹の君”の名で呼ばれる彼の本当の名はウイスタリア“セレス”ノーザンライツ。

“白銀の君”アルトウールと同じように滅多な事では真名を明かさない。ルカはそんな彼の名前を呼ぶ許しを得たのだ。

「ありがとう、ウイスタリア」

『ルカ様、私からも感謝致します。主様を救って頂き、ありがとうございます』

前に出たイシュリアが恭しく頭を下げた。本当に感謝している。ウイスタリアは怒るだろうが、主こそイシュリアの存在する意味なのだから。イシュリアにとって彼が全て。

青紫の瞳に涙を溜めて礼を言うイシュリアに、ルカは慌てて首を振った。

「そんな……感謝される事なんてしてないよ。俺は俺のやりたい事をしたただだから。あ、れ……？」

か細い声と共に体が傾く。緊張の糸が切れたのか意識を失い、崩

れ落ちたル力をイクセが慌てて受け止める。少年の顔は血の気を失って青白い。

やはり無理をしていたのだろう。呼吸は落ち着いているが、これ以上は長居出来ない。魔歌を行使した時点で限界だったのだ。

『早く此処から出た方がいい。貴公もそうだが、人の身では辛いだろう。我はまだ休息が必要なようだ。ここに留まるのは得策ではないだろうが、現世では回復に時間が掛かり過ぎる。送ってはやれんが、貴方が居るのならそれも不要だろう』

意識を失ったル力を案じるようにウイスタリアが目を細める。イクセも人の心配をするほど余裕はなかった。正直な所、立っているのも辛い。

ウイスタリアも傷は癒えたが、本来なら生命に関わる程の傷だ。失った体力と魔力だけは魔歌では癒すことは出来ない。

ウイスタリアを傷つけた人間が再び彼を襲わない保証はなかったが、失った体力と魔力を回復させるにはマナが溢れるこの空間でなければならなかった。

蒼穹であるウイスタリアの領域でなければ。

『蒼穹よ、次相見えるのは何時か分らんが、簡単に死ぬ事は許さんぞ。お前にも私にも死ぬぬ“理由”があるのだからな』

ウイスタリアを見上げてアルは言った。生きて世界を見守ることそれが“彼等”の存在理由にして生きる意味。簡単に死ぬぬ体を呪ったこともあったが、今は死ぬない理由がある。

ル力のためにも死ぬない。彼の成長を見届けるまでは。

『肝に命じておこつ。それと貴公も気を付けた方がよい。滅竜歌の

存在が知れば人と竜、双方に波紋を齎すことになるだろう』

滅竜歌の歌い手の意図は知れないが、人と竜。人竜大戦以降、寄り添いながら生きて来た二つの種族を揺るがす大きな問題となることは間違いない。時として身に余るほど強大な力は人を狂わせる。

人竜大戦の再現となれば、魔歌と言う奇跡を手に入れた人は、今度こそ竜とどちらか一方が滅びるまで争い続けるのではないか？

誰よりもウイスタリアの真意と言葉の意味を理解するアルは、重々しく頷いた。

『お前の懸念は十分承知している。だが私は……人の可能性を信じてみたくなったのだ。例えばどれ程愚かで救いようがなくとも、人は常に変化する生き物だ。人は変わる。良いようにも悪いようにも』

人間の中には本当に学習せず、救いようのない馬鹿共もいる。

だが人には竜にはない可能性があった。長い時を生きる竜は滅多な事で変化しない生物だ。

しかし寿命が短く、刹那を生きる人間は悔い改め、“変わる”ことが出来る。だからこそ、ルカと言う存在に巡り会えたアルは、人の可能性を信じてみたくなったのだ。

ウイスタリアは昔の『アルトゥール』からはまるで想像出来ない物言いに驚く反面、納得してもいた。

本当にルカという少年は彼にとっても、恐らくはアルにとっても太陽のように眩しい。ウイスタリアでさえも人について考え改めさせられた。

『本当に……貴方は変わった。驚くくらいに』

『おだてても何も出んぞ。……イクセル、ルカと共に私の傍に』

ウイスタリアとアルトウルはほんの一瞬、哀切の視線を交わすと、どちらからともなく視線を逸らした。ル力を支えるイクセはアルの言う通り、彼の横に並ぶ。

『……水面^{みなも}に波紋、拡がるが如く満ちる力^{マナ}よ。我が望みし場所、人と竜^{いき}が共生し世界と共に在る事を我は願う。白銀の名に於いて命ずる。我が証たる真名を以って鍵とせん。現世^{うつしよ}へと繋がる扉よ、今開け』

朗々と歌い上げるアルに導かれるようにして描き出される魔法陣。人には理解出来ない複雑な紋様によって構成されたそれは、最後の一節を告げると一際強い輝きを放った。

始まりの竜

魔水晶の洞窟から戻ったアルとイクセは、ル力を宿屋へと運んだ。無理に二重唱を歌った疲労もあったのか、ル力はあれから眠り続けたまま。既に日は沈み、辺りには夜の帳が降りている。

アルは枕元に座って静かにル力の寝顔を見つめていた。イクセもいたのだが、夕飯とシャワーを浴びるらしく今は席を外している。するとル力の瞼が開き、夕焼けを切り取ったような茜色の瞳が露になった。

「アル……？」

『目が覚めたか？』

うん、と返事をする、ル力はゆっくりとベッドから上体を起こした。まだ少し頭が痛く、目眩までする。無理をしたつけのようなものだが、心は澄み切った青空のように晴れやかだった。

ウイスタリアを助けられたその証がベッドサイドに置かれている。不思議な光沢を秘める青い竜笛。

「……ねえ、アル。教えて欲しいことがあるんだ」

ウイスタリアはアルはウイスタリアも同じ存在だと言った。白銀と蒼穹の名を冠する彼等は何者なのか。そして滅竜歌。ドラゴンズレイヤ

アルもまたル力が何を問いたいのかを理解していた。いつか話さねばならないと思っていたこと。それは“アルトウル”が存在する理由でもある。それを理解しつつアルは問うた。

『……何だ？』

ドラゴンスレイヤー
「滅竜歌って何？ それと白銀の君ってアルの、ううん。 “アルト
ウール” のことなの？」

じつとアルの金の瞳を見据える。十年以上一緒に居たのに自分は、
アルについて何も知らなかったということを思い知らされた。

アルもまたこんな形で話すことなろうとは夢にも思わなかった。
だがここまでル力に知られた以上、隠す必要はないし、何よりル力
にこんな表情をさせるのはもう嫌だった。

ウイスタリアに言えたことではない。本当にアルこそ、ここ十年
で随分と腑抜けになったようだ。

ドラゴンスレイヤー
『滅竜歌とはその名の通り、人が竜を滅ぼすために編み出した
最初の魔歌であり、千年前に失伝した筈の古代歌だ。そして私と蒼
穹は万象を司る “始竜” と呼ばれし存在^{もの}。そして私は唯一、この世
界の始まりより生きている』

始竜は言い換えれば、世界の支柱と言っている。死ねばマナになっ
て世界へと還る他の竜族と違い、彼等は死した時、先代の記憶を受
け継いで転生する。

だが魂は違う。アルが死に転生した場合、次に生まれて来るのは
アルトウールの記憶を持つがアルではない。そしてアルこそ唯一、
原初の時より生きる竜なのである。

「人が竜を滅ぼすために……」

アルの口から出た言葉が信じられなくて、ル力はもう一度声に出
して呟いた。

滅竜歌。人が竜を滅ぼすためにだけに編み出した最初の魔歌にして、
全ての魔歌の元型。

今でこそ人のよき隣人とされる竜族だが、まさか人がその竜を滅ぼすために魔歌を生み出したなんて、到底信じられなかった。今まで自分が歌っていたものが、元は竜を滅ぼすために生まれた歌だなんて信じたくない。

「……かつて人と竜の大きな戦いがあった。喪歌という強大な力を振るう竜族に対し、何の力も持たない人族はあまりに不利だった。そんな中、人族の中で喪歌に目をつけた人間がいた。その者は人は発音出来ぬ言葉がある喪歌をどうにかして人の身で操る術はないのかと考えたのだ。そうして生み出されたのが滅竜歌^{ドラゴンスレイヤー}。後の魔歌と呼ばれるものののだ」

人竜大戦、文献にすら残らぬ人と竜の戦いをアルは記憶している。だからこそアルトゥールは人を好きになれなかったのだ。

人が竜に勝っていたもの。それは固体数である。ただそれだけだといってもいい。

だが竜族に対抗するには同等かそれ以上の力を手に入れる必要がある。ある時、喪歌に目をつけた人間が長い時を掛け、喪歌を元としたある術式を組み上げた。

滅竜歌と名付けられたそれは、喪歌を元としてはいるが発揮される効果は全く違う。純粋なマナで構成された竜族の体を内側から破壊する、ある意味では何よりも残酷なものを人は作り出してしまったのだ。

ル力はまるで内側から裂けたようなウイスタリアの傷を思い出し、びくりと体を震わせた。あんな恐ろしく、惨いものを人は竜に使っていたかと思うと胸が詰まりそうになる。

「でも……千年前に失われたはずなんでしょ？」

『そうだ。……大戦の末期は既に戦いとも言えぬ酷い有様だった。数えきれぬ骸が、血が大地を濡らし、朱く染めていった。人も竜も戦いを続けられない程に疲弊し、明確な終わりとも言えずに戦いは終わった。やがて二つの種族は後のことを考え、滅竜歌の存在を秘匿とすることにしたのだ』

アルは目を閉じ、かつて起こった戦いを思い出す。あの光景を地獄と言わず何というのだろう。滅竜歌の出現により戦いは更に激しさを増して行き、大戦の末期はもう、ただの殺しあいではなかった。結局決着すら付かず、戦いは終わった。

だがアルは戦いに干渉することは出来ず、ただ傍観することしか許されなかった。見守ること、それが始まりの竜たる自分たちの役目だから。もどかししくて、始竜という名に縛られる自分が馬鹿らしかった。

やがて和解した双方は二度と悲劇を起こさぬため、そして後の人と竜の関係を考え、滅竜歌の存在を闇に葬ったのである。

「そんなことが……」

ルカはそれ以上、言葉を紡ぐことが出来ずに俯いた。

知らなかった。まさかそんな事があったなんて。アルはその全てを見てきたのだろう。人竜大戦や滅竜歌について語る彼の表情は固く、哀しみの色が見えたから。

ならばアルが人を嫌うのも仕方がない。いや、嫌って当然だ。知らなかったではいけない。無知もまた罪なのだから。

『ルカ、私はお前にそんな顔をさせたくて話した訳ではないぞ』

唇を噛み締めるルカの手にアルは頬をすり寄せる。そう、ルカが

気に病むことではない。全ては終わったことなのだ。

だがこの心優しい少年は当事者であるかのように心を痛めてくれる。咎めるような、だがそれでいて自分を心配してくれていると分かるアルの声音にル力は嬉しくて少しだけ淋しかった。

本当に自分はアルに守られて生きて来たんだと実感したからだ。

世界はこんなにも広くて、一番よく知っているとっていたアルのことでさえ、知らないことは沢山ある。

「……うん。ありがと、アル。今まで俺は本当にアルに守られて来たんだね。……何だかアルが始竜だって言われても実感沸かないや」

ル力は寝物語によく聞かされた話を思い出す。この世界、アルカディアを見守る始まりの竜たちの話を。

始竜なんてお伽話の中だけの存在だと思っていた。だからいきなりアルが始竜なんて言われても驚く前に、実感が全くと云っているほど沸かない。誰よりも何よりも近い存在だからこそ、親友や家族以外のアルを想像出来ないと云った方が正しいだろうか。

とその時、部屋のドアノブが回され、濡れて艶やかに光を弾く黒髪を拭きながら青年が入ってくる。青年——イクセは視線を一人と一匹に向けた。

そして気づく。どうやら自分は思いの他、空気が読めない人間だったようだ。

しかしこのまま回れ右も出来ない訳で、イクセは仕方なく口を開く。

「話は済んだのか？」

「うん、一応はね。イクセは聞いた？」

「まあな。つつても普通なら信じられない話だな」

髪を拭いていたタオルを首に掛け、大きく息を吐く。

イクセも相手がアルでなければ、与太話だと一蹴していたことだろう。

ベッドから上体を起こしたルカの髪を掻き回し、アルの頭も軽く撫でたというより、叩いた。

「今日は疲れただろう。もう休め。アルもあんま無理すんなよ」

イクセはそれだけ言うといひらひらと手を振って部屋を出る。

アルは頭を触られたことがお気に召さなかったようで目を細めていたが、それほど不機嫌ではないようだ。ルカもお言葉に甘え、アルと一緒に太陽の香りのするシーツに身を委ねた。

見つけた大切なもの

『何故、創造主は我らを作ったのだ！？　ただ見ていろとでも！？』

発せられた怨嗟の叫びは衝撃となつてアルの耳朵を打った。それほどまでに彼の怒りは凄まじく、手の付けられないものだった。煮えたぎる程の感情の波に押し流されるのではないか、そう思ったくらいだ。

しかし『アルトゥール』は彼を認める訳にはいかない。つとめて静かな声で言う。

『……』　『よ、分かっているだろう？　我等は此の世には干渉出来ぬ』

それが世界を見守る者、言い換えれば傍観者である始竜の運命だった。彼等の力をもつてすれば争いを止める事など造作もない。

だがそれでは駄目なのだ。仮に干渉したとして、それを何度繰り返せばいいのだ？

この世界に生きる生命は既に管理者の手を離れた。人や竜、そして世界は一人で歩いて行かねばならないのに。

『白銀！　貴様に言われずとも分かっている！　ではどうすれば良いと言うのだ！？　このまま傍観しろと言うのか！！　ただ死に逝く様を見続けろと言うのか！　答えろ、白銀よ！』

紫水晶よりも僅かに濃い瞳が、悲哀と激情に彩られる。彼の気持ちには痛いほどよく分かった。その怒りは大きさの違いはあれ、皆が抱いているもの。

だがそれ故にアルトゥールは頷くしかなかった。

『そうだ。……お前の言いたいことは分かる。ではどこで終わりにすればいい？ 我等は神ではないのだ。それは傲慢だとは思わないのか？』

始竜の力を持ってすれば戦いを止めることは出来るだろう。多くの命を救うことだって。それが出来たならどれほど幸せだろう。彼が言うようにただ見ていることしか出来ない。ではもし力を使つたとして、それを何度繰り返せばいいのだろう。

自分たちの意思で彼らが戦いを止めない限り、意味が無い。悲劇が繰り返されるだけ。

始まりの竜は神に等しき存在ではあるが神ではないのだ。

二人の会話を見守っていたどこまでも青く澄んだ蒼穹色の鱗を持つ竜もまたアルトウルに同意するように頷いた。

『彼の言う通りです。私たちは“神”ではない。神にはなり得ない。それは貴方もよく分かっているでしょう？ 失われる命を悼むのは構いません。ですが私たちが存在する意味をもう一度思い出してみてください。……感情に任せた物言いは出来ないはずですよ？』

森の緑より鮮やかな瞳が彼の紫の瞳とかち合った。彼女の諭すような口調と優しい瞳に一瞬言葉に詰まる。

彼女が、アルが言いたいことは痛いほどよく分かっている。彼もまた『始竜』だから。

押し黙った彼だったが、やがて苦しげに口を開いた。

『分かっている。痛いほどに。だが私はお前たちのようにはなれない。割り切れない！ 神になれないと知りつつも願ってしまう……』

彼が最後に言った、血を吐くほどに悲痛な叫びが今もまだアルの耳に残っている。彼は優しすぎたのだ。だから『あんな』結果になった。

これが夢だと言っのなら覚めてくれ。

雨が屋根を叩くようなシャワーの音でアルは目を覚ました。まだ覚醒しきっていない頭で考える。ああ、やはり夢だったのかと。

あれはそれこそ気の遠くなるような昔、まだ人と竜が争っていた時代だ。始原の時より生き続けている始竜はアルただ一人。白銀の名を持つ彼は、普通の竜など及びもつかない魔力を有する。

竜の魔力は時を経ることによって増すと言われていた。ならば始まりの時より生きるアルは一体、どれほどの力を持つというのか。

「アル、起きたの？ うなされてたけど大丈夫？」

アルが思案に耽っていたその時、青い髪から水滴を滴らせながらル力が戻って来た。アルが珍しく寝ていたから一足先に起きてシャワーを浴びていたのである。

気になったのはアルがうなされていたこと。苦しげに顔を歪め、しきりに何か呟いていた。

でもそんなことは彼と一緒にいて初めてのことである。アルは今までそんな素振りを見せたことはないし、何より決まってル力より先に起きているのだ。

『そうか。私はうなされていたか……』

呟き、自嘲するように口を歪める。夢の中で彼が発した怨嗟の叫びが今もまだ頭の中に残っている。どうして今になってこんな夢を見たのだろう。竜は殆ど睡眠を必要としない。夢だっただけ見ることも少ないのに。

目を閉じて記憶の中に残る彼を思い出す。

『何故、創造主は我らを作ったのだ！？』

かつては自分もそう思ったことがあった。見守ることしか出来ぬのなら、何故自分たちの母は始竜を作り、役目を与えたのか。

だが今は『アルトウール』を生み出した神に感謝したい。大切なものに巡り会えたから。昔とは違う、己の心の中に灯る一点の光を見つけたアルは淡く微笑した。

そんな彼の僅かな変化。普通の者なら気付かないだろうが、ル力には分かった。

「うなされてたかと思うと笑ったり、本当に大丈夫なの？」

髪を拭く手を止めて尋ねる。思えばウイスタリアの件から少し様子がおかしかった。明確に変だとはいえないが、十年以上も一緒にいたル力が微かに感じる違和感、といえはいいだろうか。

心配するル力に対し、アルは笑って答える。

『ああ、大丈夫だ。そんなに心配するな』

「ん、分かった。だけど辛い時はちゃんと行ってね。俺がアルにしてあげられる事なら何だってするから」

アルが大丈夫だと言うのなら、これ以上は聞くまい。

ただ、ル力はアルに言って欲しいのだ。彼がそうしてくれたように哀しみも苦しみも分かち合いたいから。それが『家族』ではないのか。

『ル力……』

「それじゃあ朝食取ってから出発だね。アルー」

ル力は太陽を思わせる笑みを浮かべながら、アルの特等席である肩を叩いた。

今はまだ全てを話すことは出来ない。だが時が来れば必ず、そう

思いアルはルカの肩に飛び乗る。お気に入りの特等席はやはり心地よい。

心優しい少年の横顔を見つめ、アルは小さく礼を言った。ありがとう、と。

第二奏 了

見つけた大切なもの（後書き）

第二奏、終了しました。本当に女子率が低いです……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9297w/>

アルカディア

2011年10月10日11時58分発行